

バトル・ロワイアル 誰が為の戦場か・・・

しきん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この戦いに誘われた全ての戦士達に告ぐ。  
運命に抗え、最期の一瞬まで――

目次

参加者名簿	1
本編	
プロローグ	11
第1話	21
第2話	30
第3話	40
第4話	53
第5話	63
第6話	76
第7話	86
第8話	95

## 参加者名簿

＋アズールレーン 女子8名

「エンタープライズ」

身体能力：A

頭脳：B

「ベルファスト」

身体能力：B

頭脳：B

「ジャベリン」

身体能力：B

頭脳：C

「ラファイ」

身体能力：C

頭脳：C

「赤城」

身体能力：A

頭脳：A

「加賀」

身体能力：A

頭脳：C

「天城」

身体能力：B

頭脳：S

「綾波」

身体能力：B

頭脳：B

+機動戦士ガンダムSEED 男子6名

「キラ・ヤマト」

身体能力：S

頭脳：A

「アスラン・ザラ」

身体能力：A

頭脳：A

「サイ・アーガイル」

身体能力：C

頭脳：B

「トール・ケーニヒ」

身体能力：C

頭脳：C

「ディアッカ・エルスマン」

身体能力：A

頭脳：B

「ラウ・ル・クルーゼ」

身体能力：A

頭脳：S

+機動戦士ガンダムSEED DESTINY 男子4名、女子1

名

「シン・アスカ」

身体能力：A

頭脳：C

「ハイネ・ヴェステンフルス」

身体能力：A

頭脳：B

「ステイング・オークレー」

身体能力：A

頭脳：B

「アウル・ニーダ」

身体能力：A

頭脳：C

「ステラ・ルーシエ」

身体能力：A

頭脳：D

+DRAGON BALL 男子1名

「パラガス」

身体能力：A

頭脳：C

+エヴァンゲリオン新劇場版 男子1名、女子3名

「碓シンジ」

身体能力：D

頭脳：C

「綾波レイ」

身体能力：C

頭脳：C

「式波・アスカ・ラングレー」

身体能力：B  
頭脳：C

「真希波・マリ・イラストリアス」  
身体能力：B  
頭脳：B

+チャージマン研！ 男子3名

「泉研」  
身体能力：A  
頭脳：E

「ボルガ」  
身体能力：E  
頭脳：A

「魔王」  
身体能力：A  
頭脳：C  
+M i n e c r a f t 女子1名

「ガスト」  
身体能力：A  
頭脳：C  
+アリス・ギア・アイギス 女子4名

「比良坂夜露」  
身体能力：B  
頭脳：D

「兼志谷シタラ」  
身体能力：C  
頭脳：B

「百科文嘉」

身体能力：C

頭脳：A

「吾妻楓」

身体能力：B

頭脳：B

十月姫 男子2名、女子6名

「遠野志貴」

身体能力：B

頭脳：B

「アルクエイド・ブリュンスタッド」

身体能力：A

頭脳：C

「シエル」

身体能力：B

頭脳：B

「遠野秋葉」

身体能力：B

頭脳：B

「翡翠」

身体能力：B

頭脳：C

「琥珀」

身体能力：C

頭脳：A



「ネコアルク」

身体能力：B

頭脳：C

「ネコアルク・カオス」

身体能力：B

頭脳：B

＋エリア88 男子1名

「風間真」

身体能力：B

頭脳：B

＋崩壊3rd 女子4名

「キアナ・カスラナ」

身体能力：A

頭脳：C

「雷電芽衣」

身体能力：A

頭脳：B

「ブローニャ・ザイチク」

身体能力：A

頭脳：B

「無量塔姫子」

身体能力：S

頭脳：A

＋頭文字D 男子5名

「藤原拓海」

身体能力：C

頭脳：B

〔藤原文太〕

身体能力：C

頭脳：A

〔武内樹〕

身体能力：D

頭脳：D

〔高橋啓介〕

身体能力：B

頭脳：C

〔高橋涼介〕

身体能力：C

頭脳：A

+フオートナイト 女子1名

〔ヘラルド〕

身体能力：A

頭脳：C

+フレームアームズ・ガール 女子5名

〔源内あお〕

身体能力：E

頭脳：C

〔轟雷〕

身体能力：A

頭脳：C

〔ステイレット〕

身体能力：A  
頭脳：C

「バーゼラルド」  
身体能力：A  
頭脳：B

「フレズヴェルク」  
身体能力：A  
頭脳：D

+メタルギアライジング 男子1名  
「ステイーヴン・アームストロング」  
身体能力：S

頭脳：A  
+コマンドー 男子2名  
「ジョン・メイトリックス」  
身体能力：S

頭脳：S

「ベネット」  
身体能力：S  
頭脳：D

+スライムもりもりドラゴンクエスト 男子3名  
「スラリン」  
身体能力：D  
頭脳：C

「ミイホン」  
身体能力：C  
頭脳：D

「スライバ」

身体能力：A

頭脳：B

+マブラヴ オルタネイティブ 男子1名、女子1名

「白銀武」

身体能力：A

頭脳：B

「鑑純夏」

身体能力：B

頭脳：C

+メイドインアビス 男子2名、女子2名

「リコ」

身体能力：B

頭脳：B

「レグ」

身体能力：A

頭脳：C

「オーゼン」

身体能力：S

頭脳：B

「ボンドルド」

身体能力：A

頭脳：S

+金田一少年の事件簿 男子1名

「金田一」

身体能力：B

頭脳：A

十ジパング 男子1名

「草加拓海」

身体能力：B

頭脳：S

以上、男子34名と女子36名の計70名がこのテストの為に集められた。

この中で生き残る事が出来るのはたった1人。

生き残りたければ、殺せ。

友を。

主を。

従者を。

恋人を。

そして・・・倒すべき、乗り越えるべき敵を。

## 本編

### プロローグ

「……ん」

——もう、朝か。

「……んん」

重い瞼が、徐々に軽くなっていく。

視界が開いていく。

目を覚ますと、俺は大きな部屋で、座った状態で机の一つに突っ伏していた。多目的ホールや新幹線、飛行機の客室によくあるような、椅子の後ろ側(?)に付いているタイプのものだ。椅子の方を見ても、こつちも多目的ホールによくありそうな、座る所が背もたれ側に畳まれるタイプのものだという事が分かった。というか、机があれの時点で大体察しが付く。だが正直、それ以外全く分からない。

「ここは……どこだ?」

俺はゆつくりと辺りを見回す。周りには、俺以外の何十人もの人達がいた。その人混みの中には仮面を付けている男や褐色の肌の少女、他の人よりも明らかに筋肉モリモリの男数名、更には明らかに人外である者達……一目で多種多様な人達がさつきまでの俺と同様に机に突っ伏していた。

だが、どういう訳か皆揃って共通する点があった。一つ目は机に突っ伏して眠っている事、二つ目は学校でよくありそうな制服(白陵大付属柘学園のものではない)を着ている事、そして三つ目は首に黒い首輪が付いている事だ。

「……何がどうなってるんだ?」

……?ちよつと待て、もしかして——

自分の身体を見た。

そう、制服を着ていたのは……周りの人達に限った事ではない。俺もいつの間にか制服を着せられていたのだ。そして、首には周りの人達同様、黒い首輪が付けられていた。

それ以外にも気になった事がある。それは、普通であれば学校にいない筈の兵士と思しき者達だ。だが、揃いも揃って見た事も無いような装備を身に着けている。中には周りの人達に銃を向けている奴もいる。

次第に周りの人達が目を覚まし、騒がしくなってきた。すると、それを待っていたかのように皆の頭上の照明がオフになり、反対にステージに向けられている方の照明がオンになった。そして、裏方(?)からステージ上に数人の男が出て来た。まるで協会の神父のような黒髪黒眼の男を先頭に、それに続くようにスーツ、ネクタイ、サンダラスの三つを黒で統一した男達が数名入る。

最初に入って来た神父の男を中心に黒板の前に並び、私達の方を向いて立つ。神父の男は俺達をまるで獲物を見定めるかのように眺めている。

この男達は何だ？俺達に一体何をするつもりなんだ？そう思った直後、神父の男が口を開く。

「おはよう、諸君。よく眠れたかな。私は今回のテストの進行をを務める *Aperture Science* の言峰綺礼という。突然ですが、今から諸君らには殺し合いをしてもらう」

は・・・？殺し合い・・・だって!?

神父の男——言峰の言葉に、周りの人達は突然の出来事に戸惑い、騒めきだす。暫くして教室内が静まると、言峰は話を続けた。

「これより、このテストのルールを説明する。一度しか言わないのでよく聞くように。質問は一切受け付けない」

この言葉によって、教室が静まり返る。説明だけでも聞くしかない・・・そう思った。

「これから私がくじを引き、そこに書かれた名前を読み上げる。名前を呼ばれた生徒は前に来てもらい、1人につきバッグを一つ支給する。中身は1日分の水と食料、コンパスにライト、筆記用具、そして殺し合いに役立つアイテムが入っている。何が入っているのかは開けてからのお楽しみだ。なお、この島に来る時に諸君らの荷物は全て回収させてもらった。これは事前に武器を持ち込んでテストを有利

に進めるのを防ぐ為である。バッグを受け取り、この建物から出た時点でテスト開始となる。名前を呼ばれた生徒がバッグを受け取ってから一定時間経過後に私が再びくじを引き、呼ばれた生徒はバッグを受け取りテスト開始、これを繰り返す。このテストにおいて、ルール違反は存在しない。あらゆる手段を以て思う存分殺し合うように。更に、この島には特殊な設備があり、この島では魔法や超能力といった特殊能力は使えない。己の肉体と頭脳そして支給された武器を駆使して戦ってもらおう。尤も、支給される武器次第ではこの手の能力を使う事が出来るかもしれない・・・運が良ければ、100%とまでは行かずとも、自らの特殊能力を使う事が出来るかもしれないが。そして、既に気付いていると思うが、諸君らの首に特殊な首輪を付けさせてもらった。その首輪は、我々AS社がいつでも爆破する事が出来る。島から逃げたり、我々に反抗するといった、我々の意に反する行為をした者はその首輪を爆破する。また、首輪を無理やり外そうとしても爆発するので注意するように。生きて帰りたければ最後の1人になるまで殺せばいいという訳だ。そして、最後まで生き残った1人にはケーキと死ぬまで遊んで暮らせる程の大金、そして如何なる願いを一つだけ叶えられる権利をやる。以上で私からの説明を終わらせてもらおう。諸君らの健闘を心から祈る」

最後の1人になるまで殺し合いだと？ふざけるな。ここにどれだけの人間がいると思ってる！

怒りがこみあげてくる。

「何なんですか、貴方は！」

突如として大きな怒号が聞こえる。声のした方向に目を向けると、紫色の瞳を有した茶髪の少年がいた・・・なんか、声が俺と同じだな・・・気のせいかな？

「貴方の言っている事は滅茶苦茶だ！何の関係もない人達を拉致して殺し合いをさせるなんて、幾ら何でもひどすぎる！」

「キラ・・・!?!」

「ん？おいアスラン、知ってるのか？」

エメラルドグリーン色の瞳と紺色の髪が印象的な少年は驚き、金髪の



黒人少年がその少年に何か聞いている。

そして更に先程の茶髪の少年に続くように、他の人達も声を上げ始める。

「今の男の子の言う通りだ。何で俺達がこんなところで殺し合わなきゃならないんだ？まさか、プロジェクト4が一枚噛んでいるんじゃないんだろうな！」

蒼い瞳を片方金髪で隠している男が言峰に問い詰める。

「何なんだよ！知らないところに連れてこられて、起きていきなり殺し合えなんて言われて訳分かんないよ！」

茶髪の少年が、頭を抱えて叫ぶ。その声は恐怖心さえも入り混じっているようにも見える。

「え？殺し合い？すまないが、そんな事に吾輩を巻き込むのは止めていただけない？金なら幾らでも出すので、免除してもらいたい」

マスコットキャラのような猫が言峰に取引を持ち掛けようとする。何ていうか——とんでもなく肝が据わっている!?

「ちよつと待ったちよつと待った！俺、思い出したんだ！今日、親父が危篤で、すぐに駆け付けなきゃならない！代わりに知り合いを攫ってくるから、俺は免除してくれ！頼む！」

首・・・？にマフラーを巻いた、海月に見えなくもない謎の生き物も言峰にそう訴える。

「それは駄目だ。金で免除など認められない。ましてや、他の人間を身代わりにしようなど、以ての外だ。これは諸君らに与えられた運命<sup>Fate</sup>だ。これから己の人生を生き抜く為の試練だ。安心しなさい。このテストによる殺し合いでは、戦いに必要な力を持つ強者は勿論、戦いに必要な力を持たない者さえも勝利の可能性を持つ。始まる前から逃げ腰になる必要は無い。支給される武器は開けてからのお楽しみというのはまさにそれだ」

言峰の演説を聞いた人達が口を開く。

「殺し合いか。確かに面白い事になりそうだ」

ミントグリーン<sup>の</sup>髪の毛の男が興味を示す。

「フフフ・・・戦いとは傷つける事、戦いとは傷付く事、戦いとは痛み

を交換する事よ。痛みを通して互いの想いに触れ合うの。すなわち、愛に他ならないわ」

狐耳の女性が顔を赤らめて自らの持論を堂々と展開する。

「ばーぜはねー、みんなで遊ぶの大好きだよー」

話し方からしてどう考えても精神が幼いのだろう、金髪碧眼のウサ耳の少女がにつこり笑って万歳のポーズをする。

「支給武器、爆発する首輪、特殊能力の使用不可、脱出不可能な島：なるほど。これらのルールは口だけは達者なトーシロー共の為に作られたのですな。そうでもしないとメイトリックス以外のこんなただのカカシ共、俺なら瞬きする間に・・・（パチン）皆殺しに出来る。そんなんじやあ、俺とメイトリックスの戦いまでずーっとつまらない展開ばかりですからな」

フレディ・マーキュリーにそっくりな顔の男が挑発する。

「待ってーこのゲームに乗る必要は無いわよ！クラスメイト同士で殺し合う事なんて無い！」

さっきのスカーフ海月と同じく海月に近いシルエット・・・ではあるが、明らかに大きい謎の海月が皆に呼び掛ける。

「五月蠅い、そのデカ海月擬き!!というか、なんで貴女のような化け物まで殺し合う相手になるのですか!?!」

ロング黒髪碧眼の少女が謎の海月を指して怒鳴る。

殺し合いにノリノリな者がこんなにいるのか!?!

こんな様子を見て、言峰が満足そうに頷き、口を開いた。

「最後に、首輪の威力を諸君らに知ってもらおうとしよう。そうだな、アシスタントは・・・」

言峰は俺達を見て・・・

「君にしよう」

そう言いながら携帯電話を取り出して何かの命令を下した直後、不気味な電子音が鳴り響く。

その音が出ているのは・・・

「私・・・?」

「綾波!?!」

水色のショートヘア、そして赤い瞳の美少女の首輪だった。

電子音のテンポは、最初こそゆっくりだったが、段々速くなっていき……

「碇く——」

ドガアアンツ!

爆発音と共に、少女の首が爆ぜた。

「あ……ああ……」

綾波イイイイイイイイイイイイイイ!!!」

さつき頭を抱えていた少年の悲痛な叫びが木霊する。

「きゃああああつ!」

「お、おい!嘘だろ!」

「貴様……ふざけるな!」

その惨劇の直後、あちこちから悲鳴や恐怖、怒りが籠った様々な声が聞こえてくる。

それを聞きながら少女の亡骸を見て言峰は黒服に掃除しておくよう命じた。

「さて、諸君。開始前に被験者が1人減ってしまったが、問題は無いでしょう。首輪の威力がどれ程のものなのか分かったところで、そろそろ始めるとしよう」

言峰はそう言つて、黒服に用意させたくじを引く。

「最初の出発者は……男子33番、白銀武」

——俺が、最初なのか。

俺は教卓の前へ行き、黒服からバッグを受け取る。すると、言峰が私に話しかけてきた。

「ホールを出て廊下の案内板に従えば外に出られる。そうすればテスト開始だ。検討を祈る」

恐怖で手が出そうになる。だが、何とか耐え抜いた。ここで醜態を晒せば、即座に殺される。そう思うと、出そうになった手が引つ込むような感覚を覚えて抑える事が出来たのだ。

白銀武がホールから出る。

このふざけたテスト……バトル・ロワイアルは幕を開けたのだっ

た。

「女子26番 綾波レイ 死亡」

俺は廊下の案内板に従ってわき目も振らず走る。そして、建物から外に出た。

ふと、建物の方向に振り向いて見上げる。その建物は、非常に高いツインタワービルだった。そして、今出た出入口の両脇には体をボディアーマーで、そして頭をヘルメットで覆った兵士が立っていた。再びこのビルに入ろうとする者を射殺する為なのだろう。

そうか、俺達はこのビルの一室に設けられた、多目的ホールを模した部屋にいたのか。このくらいのビルなら、あのホールの一つ、中に置けない事も無い。

・・・いつまでも出入口の近くにいたら他の生徒と遭遇するな。先程のやり取りからして、殺し合いに積極的な人は大勢いる事は間違いない。

畜生！目が覚めたらこんな殺し合いに参加させられるなんて・・・

！

俺は、ビルから離れようという一心で走り出した。

「男子33番 白銀武」

身体能力：A

頭脳：B

武器：???

スタンス：とにかく生き延びる

思考：遠くへ逃げるしか・・・！

身体状態：正常

精神状態：正常

全ての生徒が出発し、ホール内にいるのが言峰と黒服達だけになった後、彼らも教室を後にし、ビル内にあるVIPルームへと向かった。そこには、金融界、政界、芸能界、果てには裏社会の大物といった世界に名立たる30人以上ものVIPが顔をそろえていた。

この島にあるAperture Scienceツインタワービルは参加生徒を管理する為の部屋だけでなく、VIPをもてなす為の部屋も用意されている。

そう、彼らVIP達はこのテストを娯楽として楽しむ為、この島に来たのである。VIP観戦ルームから生徒達のテストの様子を観戦しているのだ。それも、ただ観戦するだけではない。どの生徒が生き残るかというギャンブルも行われており、テスト1回で国家予算レベルの大金が動くとの噂が絶えない。

そんなVIP達の前に立ち、言峰は挨拶をした。

「私立黒須学園3年B組70名を対象としたテスト、無事に開始致しました。それでは皆様にクラスの名簿をお渡しします。黒字が生存、赤字が死亡を表します。誰が生き残るのか、ぜひとも予想してみてください。全滅、という可能性もあります」

〔主催〕

Aperture Science (Portal)

私立黒須学園 3年B組 名簿

〔男子01番 ステイング・オークレー〕

〔男子02番 デイアツカ・エルスマン〕

〔男子03番 金田一一〕

〔男子04番 草加拓海〕

〔男子05番 藤原文太〕

〔男子06番 シン・アスカ〕

〔男子07番 アウル・ニード〕

〔男子08番 碓シンジ〕

〔男子09番 泉研〕

〔男子10番 キラ・ヤマト〕

〔男子11番 ジョン・メイトリックス〕

〔男子12番 サイ・アーガイル〕

〔男子13番 ボルガ博士〕

- 〔男子14番 遠野志貴〕  
〔男子15番 魔王〕  
〔男子16番 トール・ケーニヒ〕  
〔男子17番 高橋涼介〕  
〔男子18番 風間真〕  
〔男子19番 アスラン・ザラ〕  
〔男子20番 ネコアルク・カオス〕  
〔男子21番 パラガス〕  
〔男子22番 ボンドルド〕  
〔男子23番 スティーヴン・アームストロング〕  
〔男子24番 藤原拓海〕  
〔男子25番 ラウ・ル・クルーゼ〕  
〔男子26番 ミイホン〕  
〔男子27番 レグ〕  
〔男子28番 スラリン〕  
〔男子29番 武内樹〕  
〔男子30番 高橋啓介〕  
〔男子31番 ハイネ・ヴェステンフルス〕  
〔男子32番 ベネット〕  
〔男子33番 白銀武〕  
〔男子34番 スライバ〕  
〔女子01番 アルクエイド・ブリュンスタッド〕  
〔女子02番 吾妻楓〕  
〔女子03番 遠野秋葉〕  
〔女子04番 赤城〕  
〔女子05番 シエル〕  
〔女子06番 ネコアルク〕  
〔女子07番 キアナ・カスラナ〕  
〔女子08番 比良坂夜露〕  
〔女子09番 加賀〕

- 「女子10番 兼志谷シタラ」  
「女子11番 リコ」  
「女子12番 フレズヴェルク」  
「女子13番 ステラ・ルーシエ」  
「女子14番 ラファイー」  
「女子15番 翡翠」  
「女子16番 轟雷」  
「女子17番 ジャベリン」  
「女子18番 鑑純夏」  
「女子19番 無量塔姫子」  
「女子20番 琥珀」  
「女子21番 オーゼン」  
「女子22番 ブローニャ・ザイチク」  
「女子23番 百科文嘉」  
「女子24番 ヘラルド」  
「女子25番 ステイレット」  
「女子26番 綾波レイ」  
「女子27番 式波・アスカ・ラングレー」  
「女子28番 エンタープライズ」  
「女子29番 ガスト」  
「女子30番 雷電芽衣」  
「女子31番 ベルフアスト」  
「女子32番 源内あお」  
「女子33番 天城」  
「女子34番 綾波」  
「女子35番 真希波・マリ・イラストリアス」  
「女子36番 バーゼラルド」

生存者、残り69名

## 第1話

俺は走った。もっと、もっとビルから離れた所へと。その一心でひたすら走った。

どのくらい走ったのかは分からない。俺はいつの間にかビルからだいぶ離れた所にいた。

高い所・・・山の頂上だろうか。それに、家もある。

「これで当分の間は一安心か」

どう見ても人間じゃない奴もいた。あんなのとも殺し合わなければならぬなんて、どうかしてるよな。ハハハ・・・だが、ここで倒れる訳にもいかないんだ。

俺は、生まれて初めて誰かを殺さず、尚且つ誰にも殺される事無く生き延びる方法を考えた。

考え始めてから少し経った時、俺はある事を思い出す。

「そういえば、武器が支給されていたんだっけな・・・少し見てみるか」俺はバッグの中身を確認する事にした。

そう考えながらバッグをあさり、その中に入っていたそれを見る。

「お、おい・・・これって、まさか——!？」

バッグに入っていたのは——

「男子33番 白銀武」

身体能力：A

頭脳：B

武器：???

スタンス：とりあえず生き延びる

思考：本当にあつたなんて・・・!?

身体状態：正常

精神状態：驚愕

あーあ、殺し合いなんて勘弁してくれよ。急にあんな事言われたってなあ・・・。

男子29番、武内樹は酷くしよげ暮れていた。



本当なら、今日はレビンを納車する筈だったのに、こんなとこに連れて行かれて、更に殺し合いなんてな・・・拓海もいたし、早く合流しよーつと。

「あつ、そーういや武器がバッグの中に入ってるって、あのおっさんが言ってたな。強い武器だと良いなー。何せ化け物がいたし・・・せめて銃でも無いと、もし襲われたら勝ち目無いよ。どーれ、中身は――」

栄養ドリンク。

栄養ドリンクのような何かが入っている。

イツキの支給武器はγグリフェプタン。カテコールアミンをベースとした物質で、人体に投与されるとドーパミンやノルアドレナリンに似た脳内伝達物質を生成する、言うなればある種の麻薬である。服用すると『火事場の馬鹿力』を出し続けさせると共に多幸感を発生させ、破壊衝動を齎す反面、凄まじい禁断症状も引き起こしてしまう為、定期的に服用する必要がある。

なん・・・だと・・・

勿論、そんな事など全く知らないイツキは絶望のどん底に落とされたような表情となっていた。

「こんなので戦えるか！てゆーか・・・そもそもこんなの武器ですらねーよ!!」

こうなったら・・・化け物とか殺し合いに乗ってる奴とかの目を掻い潜って拓海と合流するしかないな。出来る事ならこんな島から――

しかし、イツキの思考は強制的に終わりの時を迎えさせられる。突如としてイツキを背後から刺されるような痛みが襲う。

「ぎゃあああああ!!」

あ――が、が――

イツキは一体何事かと振り向いた。

眼前にいたのは、黒い丸刈りの男。

「だ・・・誰・・・？」

余りにも急な事態に、イツキは冷静な判断をする事もままならな

い。訳も分からず、自分を刺した相手に何者かという問いを投げかけてしまう程だ。

「これから死ぬ奴に何も言う事は無い。これは私からの手向けだ」  
「ぐ、ああ——」

丸刈りの男——男子04番、草加拓海の返答を聞いた途端、パニック状態に陥ったイツキは辺りをキョロキョロと見回した。

その時、イツキの視界にある物が映った。

それは、自分の腹から突き出ている刃。

あ・・・ああ・・・

「ぎゃああああああああああああ!!」

人生最後の断末魔を上げた直後、イツキは背と腹から血飛沫を吹き出しながら前に倒れた。

イツキの死を確認した草加は視線をイツキのバッグに向ける。

バッグに入っているγグリフエプタンを見つける。

「これは・・・飲み薬？使いどころに気を付ける必要があるしそんな物だが、ありがたく貰って行こう」

草加はγグリフエプタンを自分のバッグに入れると、装備している支給武器である立体機動装置のアンカー付きワイヤーを近くの木々に射出し、素早い空中機動でその場を去った。

「男子04番 草加拓海」

身体能力：B

頭脳：S

武器：立体機動装置

γグリフエプタン

スタンス：優勝してジパングを創生する

思考：次の相手を探す

身体状態：正常

精神状態：正常

「男子29番 武内樹 死亡」

「にゃああああああああ!!だ、誰か！誰か助けてえええええ!!」

大声を上げながら、それは逃げていた。

金髪赤眼、そして猫耳が特徴的な、マスコットキャラのような謎のナマモノ。

女子06番、ネコアルク。

地下にある猫の王国グレートキャッツビレッジに住んでいる、完全無欠の猫である。

だが、ここ最近では天敵(+α)に振り回される事もあり、永遠のライバルに一族を一網打尽にされ、バイオレンスなバイオリニストからは一方的に可愛がられ、拳句の果てには家政婦に捕まって動物実験の被験体にされたり、仕舞いには苦勞して従えたメカメイドにさえも乱雑に扱われる。

ここまですると、逆に凄いかもしれない。

そんなネコアルクにも、願いはある。

それは、グレートキャッツビレッジ猫の王国の再興。

そして、現在——

ネコアルクはテスト開始早々、逃走劇を繰り広げていた！

対する追手は、黒髪黒眼、左目は潰れていて、褐色の肌と黒い口ひげが特徴的な中年のサイヤ人。

男子21番、パラガスである。

「パラガスでございませう☆その猫！お前を含む俺以外の参加者を全員葬り去れば、俺の敵は最早1人もおらん!!俺の帝国は、永遠に不滅になるという訳だあ!!」

パラガスにも願いがある。

ネコアルクの願いが猫の王国グレートキャッツビレッジの再興であるならば、パラガスの願いはベジータ王への復讐を果たし、最強の宇宙帝国を築き上げる事である。

パラガスは目を点に、口を小さくし、両手を上下にバタバタと振りながら走っている。

一言で表すならば『荒ぶるパラガス』、略して『荒ガス』。

「なんだ、あのキモい親父!?!明らかに殺意の気を放っている!!え、ええい!こっち来るにや!!」

てゆうか、アタシに支給された武器が無駄に重くて走りづらい!

何でこんなのが武器として支給されるのか、理解に苦しむ・・・!!  
ネコアルクの支給武器はハイパーハンマー。

かの伝説のモビルスーツ、RX-78-2ガンダムの武器の一つとして有名な、棘とチェーンの付いた鉄球だ。

尤も、ネコアルクが持っているのはそれを10分の1のスケールに落とし込んだもののだが、それでも武器としては重い方だ。

しかも、重さの弊害はただ単に持ち主の足枷になるというだけではない。

このハイパーハンマーの場合、投げて使うのがスタンダードな使い方であるが、これには投げた時に持っている者が引っ張られてしまう危険性も孕んでいる。

故にネコアルクにはハイパーハンマーをマニュアル通りに使う事が不可能だったのである。

「フアアアアアアアア!!」

パラガスは奇声を上げながら、尚もネコアルクに迫って来る。

う、うわあああ!?!不味い、このままでは追い付かれる!!

こ、こうなったら――

「いい加減にしろおおおー！ー！ーっ!!」

ネコアルクはパラガス目掛けて、ハイパーハンマーを思い切り投げた。

渾身の一撃は、見事にパラガスに直撃した。

「D o o r r ! ?」

パラガスはハイパーハンマーを上半身に受けた。恐らく、顔面にも棘が当たっているだろう。

そのまま仰向けに倒れるパラガス。上半身の彼方此方から血が出ている。

「ね、猫に殺されるとは・・・これもサイヤ人の、定め・・・か――」

パラガスはそう言い残し、力尽きた。悲願は、達成されなかった。

「え・・・?し、死んだ???よっしやあー！ー!!大勝利だにや!!ざまあみろ、アスパラの化身!!野菜系キャラが最強と言われていた時代は、とつくの昔に終わりを迎えたのである!!」

フフフ・・・さくで、コイツの武器をちよろまかしますかな。何が  
出るかな、何が出るかな――

パラガスのバッグの中を見る。

入っていたのは、蓋のようなものが付いた瓶が五つ。中には金属特  
有の光沢を放つ液体が入っている。

え、何・・・？

何これ・・・水銀？

クロムスプラッシュ。

爆発範囲内にいる物体をクロム化させる特殊な手榴弾である。

クロム化した状態で高速移動する際は、丸い形が特徴的なプロブ形  
態となる。

更には紙や木材といった可燃物に耐火性を付属させる事も出来る  
為、上手く使えば非常に強力な特殊武器と言えるだろう。

だが、そんな事など知る由も無いネコアルクは動揺を隠せない。

冗談じゃねー!!こんなの、使い道があるとすれば、川の上流から流  
して公害攻めにするぐらいでは!?

そもそもこの親父はこんなのを使って、どうやってアタシを殺すつ  
もりだったのか!?

あの何とかサイエンスとかいう連中の正気が疑われますニャ・・・。  
はあ・・・アタシに支給された鉄球といい、この水銀といい、本当  
に大丈夫?!

不安に襲われながらも、ネコアルクは歩き出す。

「女子06番 ネコアルク」

身体能力：B

頭脳：C

武器：ハイパーハンマー

クロムスプラッシュ5個

スタンス：優勝して猫の王国を再興する。  
グレートキャッツビレッジ

思考：良い武器が欲しい・・・

身体状態：正常

精神状態：正常

〔男子21番 パラガス 死亡〕

私立黒須学園 3年B組 名簿

〔男子01番 ステイング・オークレー〕

〔男子02番 デイアツカ・エルスマン〕

〔男子03番 金田一〕

〔男子04番 草加拓海〕

〔男子05番 藤原文太〕

〔男子06番 シン・アスカ〕

〔男子07番 アウル・ニード〕

〔男子08番 碓シンジ〕

〔男子09番 泉研〕

〔男子10番 キラ・ヤマト〕

〔男子11番 ジョン・メイトリックス〕

〔男子12番 サイ・アーガイル〕

〔男子13番 ボルガ博士〕

〔男子14番 遠野志貴〕

〔男子15番 魔王〕

〔男子16番 トール・ケーニヒ〕

〔男子17番 高橋涼介〕

〔男子18番 風間真〕

〔男子19番 アスラン・ザラ〕

〔男子20番 ネコアルク・カオス〕

〔男子21番 パラガス〕

〔男子22番 ボンドルド〕

〔男子23番 ステイヴン・アームストロング〕

〔男子24番 藤原拓海〕

〔男子25番 ラウ・ル・クルーゼ〕

〔男子26番 ミイホン〕

〔男子27番 レグ〕

〔男子28番 スラリン〕

〔男子29番 武内樹〕

〔男子30番 高橋啓介〕

〔男子31番 ハイネ・ヴェステンフルス〕

〔男子32番 ベネット〕

〔男子33番 白銀武〕

〔男子34番 スライバ〕

〔女子01番 アルクエイド・ブリュンスタッド〕

〔女子02番 吾妻楓〕

〔女子03番 遠野秋葉〕

〔女子04番 赤城〕

〔女子05番 シエル〕

〔女子06番 ネコアルク〕

〔女子07番 キアナ・カスラナ〕

〔女子08番 比良坂夜露〕

〔女子09番 加賀〕

〔女子10番 兼志谷シタラ〕

〔女子11番 リコ〕

〔女子12番 フレズヴェルク〕

〔女子13番 ステラ・ルーシエ〕

〔女子14番 ラフィー〕

〔女子15番 翡翠〕

〔女子16番 轟雷〕

〔女子17番 ジャベリン〕

〔女子18番 鑑純夏〕

〔女子19番 無量塔姫子〕

〔女子20番 琥珀〕

〔女子21番 オーゼン〕

〔女子22番 ブローニャ・ザイチク〕

〔女子23番 百科文嘉〕

〔女子24番 ヘラルド〕

〔女子25番 ステイレット〕

〔女子26番 綾波レイ〕

〔女子27番 式波・アスカ・ラングレー〕

〔女子28番 エンタープライズ〕

〔女子29番 ガスト〕

〔女子30番 雷電芽衣〕

〔女子31番 ベルファスト〕

〔女子32番 源内あお〕

〔女子33番 天城〕

〔女子34番 綾波〕

〔女子35番 真希波・マリ・イラストリアス〕

〔女子36番 バーゼラルド〕

生存者、残り67名



## 第2話

うわあ、どうしよう・・・

あんな大勢の人間だけじゃなく、ゲームとかアニメとかでしか出てこないような奴とまで殺し合わないといけないなんて、全然勝てる気しないんだけど・・・でも、島から出ようとする、首輪が爆発するのがな・・・

女子10番、兼志谷シタラ。

長い茶髪、エメラルドグリーンの瞳、褐色の肌、低身長、そして巨乳。オタクに限れば、誰よりも属性が盛られていると言っても過言ではない、成子坂のかしましオタク。

そして、忘れてはならない。彼女はヴァイスに対する唯一の対抗手段『アリスギア』の操縦に必要不可欠なエミツシオン適性を持つアクトレスの1人。もう一つ付け加えるなら、射撃に自信があり、スナイパーライフルを使った狙撃を得意とする。

だが、そんなシタラにも弱点はある。

明るく活発な性格だが、裏を返せば、繊細で打たれ弱い豆腐メンタル。

故に、シタラがこのテストで最初から自信を失くすのは必然と言える。

シタラの災難は更に続く。

「しかも、支給武器ってこのキノコ三つだよね・・・絶対ハズレだ」

傘の色が緑に白い水玉模様という、独特な見た目のキノコが三つ。これがシタラの自信を失くす更なる要因となっている事に違いない。

どうせ持っけていても邪魔だし、ここで食べちゃおう。

シタラは早速、キノコを三つとも頬張る。

その味は、あまり良くない。

「ここで何をしている?」

不意に背後から声をかけられる。

ひッ——!?

シタラは一瞬ビクツと身体を震わせた後、声のした方向へと振り向く。その方向では、何者かが4〜5 m程距離を取り、サブマシンガンと思しき銃を構えていた。

「うわあああああ!？」

相手を見たシタラは思わず悲鳴を上げる。無理もない。その相手の姿を初めて見た者であれば、誰だって驚くだろう。

シルエットこそ人型ではあるが、鈍色の肌の時点で人間ではない何かであるのは誰の目にも明らかだ。

女子24番、ヘラルド。

ラストリアリティの1人で、この島とは違う、とある島がクロムに侵食された事件の張本人である。

当然、シタラはヘラルドの正体もそれが関わった事件も知らない。さ、最初の相手が人間じゃない何かなんて、嘘・・・嘘、だよな？夢なら覚めてほしい——

——あれ？でもこの人(？)、もしかしたら意外と話の通じる強い助っ人って可能性、あるかも・・・？

そう思ったシタラは、恐怖を必死に押し殺してヘラルドに尋ねる。

「あ——ああ・・・えっと、初めまして？私、兼志谷シタラって言うんですけど・・・あの、良かったら私と一緒に島から——」

「フン・・・無駄な足掻きはするべきではなかったな」

ヘラルドはそう答えるや否や、持っているサブマシンガン——UZIのトリガーを引く。

「えっ——」

銃口から吐き出される幾つもの銃弾。

無情にも、それらの殆どはシタラの身体を貫いた。

仰向けに倒れるシタラ。

瞳は光を失っていた。

ふ——ククク。

事切れたシタラを見ながらヘラルドはほくそ笑む。

手始めにこの人間は葬った。これが始まりだ。

どうも、私が今いるのはあの島ではないようだが、人間はこの島に

おいても邪悪だ。

この人間を手始めに、私がこの島の人間全てを葬ってくれる!!

ゴオオオオオオオオ——

む?

後ろから何かの音が聞こえる。

音は段々大きくなっていく。恐らく何者かが近づいて来ているのだろう。

ヘラルドは振り返る。

目の前にいたのは、大きさだけでも人間の10倍はあろうかという程の巨人。

——は?

な、何だこれは・・・??

ヘラルドですら見た事の無い、金属で造られたと思しき巨人は着地し、2〜3m程手前で止まった。

『開始早々、テストに乗っている者が・・・どうしたのですか?そんなに驚いた表情をして・・・貴女のような人は、醜い笑顔を浮かべている方がずつとお似合いだと思います』

スピーカーでも付いているのだろうか、巨人から声が聞こえてきた。

参加者として集められた人間達の中にこんなのはいなかった。

もしや、これも支給武器なのだろうか。

だとすれば、腹立たしい。何故、私にそのような代物が支給されなかったのだ。

ヘラルドの腸は既に煮えくり返っていた。

「何・・・?」

『そういえば・・・貴女のその武器は随分と慎ましいのですね。そんな小さな銃では、蚊蜻蛉を撃ち落とす程度の役にしか立たなさそう・・・このようなテストに乗るようなクズである貴女には、丁度良いのではないですか?』

あつという間に、ヘラルドの堪忍袋の緒が切れた。

「黙れエ!!」

ヘラルドは怒りに身を任せ、クロム化した狼を召喚しようと身構える。

何も起きない。

何故だ。

何故だ何故だ何故だ。

ヘラルドはもう一度身構える。

しかし、何も起こらない。

『どうしたのですか、そんなに慌てて。一応言っておきますが、この島では特殊能力は使えません。運が良くてもリミッターがかかってフルに発揮出来ません。己の運に賭けようと思っていたのでしようが、無駄な足掻きに終わったようですね。ホールを出る前の説明を聞いてなかった？ああ、つまりは人の話なんて聞かなくても、自分の力だけで何でも出来ると思っていたのですね。てっきり、貴女のような人は話をちゃんと聞く性格なのかと思っていました。先程の殺しも、自分の力だけで何でも出来ると思つての事だったのでですね』

相手が誰なのかは知らないが、こんな奴の話とやらを聞くだけでも脳梗塞になりそうだ。だが、下僕の狼を召喚出来ない以上、UZIで如何にかするしかない。

「ああああああああ!!!」

ヘラルドはヤケクソと言わんばかりに、喚き声を上げながら乱射した。しかし、9×19mmパラベラム弾をどれだけばら撒いたところで、巨人が相手では何の意味も成さない。

『あのですね・・・勘違いしてほしくないのですが、私はこんなテストは大嫌いです。人を殺すのは嫌ですし、何より自分の友を手にかけるのはどうしても避けたいのです。ですが・・・』

声の主は一つ深呼吸し、話を続ける。

『このテストに乗れば、貴女のように自分から望んでテストに乗るようなクズを殺せる・・・!テストを催す悪さえも斬れる・・・!それが出来るだけの力を、今の私は持っている・・・!!そう考えると、もう・・・抑える事が出来ません。これは殺人ではない・・・粛清だと・・・裁きの鉄槌だと・・・誰かが、私にそう囁くのです・・・!!』

声の主はそこで話を終える。  
直後、巨人が動き出す。

右足を上げる。そして右足が再び地面に近づいていく。  
しかし、右足の下には――

「はッ――!?はっはっはっ、や、や、やめる!やめる!!う、うあああ  
あ・・・あああああああああああ!!!」

ズシン・・・  
地響き。

そして、また右足が上がる。

その下には・・・ヘルルドがいた所には、クロム色のシミが染み込まれ、かつてUZIだった鉄屑が転がっていた。

巨人の胴体部・・・その中にあるコックピットのシートに座り、左右の操縦桿を握る、衛士強化装備を身に纏った少女は、網膜投影で映し出されるモニターに映るそのシミを見つめていた。

女子02番、吾妻楓。

彼女もまた、アクトレスである。

嘗ては叢雲工業最強のエースだった経歴を持ち、現在は成子坂製作所に所属している。

この島では最早、関係のない話ではあるが。

そして、楓に支給されたのは撃震<sup>F14J</sup>。世界初の戦術歩行戦闘機、その日本仕様である。

先ずは1人目・・・他の奴も必ず殺します。

楓はペダルを踏み込み、撃震の跳躍ユニットを吹かす。

そして、操縦桿とペダルを器用に動かし、己の思い向くままに撃震を飛ばす。

この島に存在する悪を斬る為に。

「女子02番 吾妻楓」

身体能力：B

頭脳：B

武器：撃震

99式衛士強化装備（※撃震とセットで支給された）

スタンス：AS社とテストに乗ってるクズ共を斬る

思考：アイツ等もクズも全員殺す

身体状態：正常

精神状態：正常

「女子24番 ヘラルド 死亡」

撃震が飛び去った直後、1人の少女が起き上がる。

「あれ・・・？私、生きてる・・・．．．なんで・・・？」

なんと、ヘラルドに殺された筈の兼志谷シタラだった。

シタラは辺りを見回す。

おかしい。

確かにあのお化けに撃ち殺された筈なのに、傷も完全に消えて無くなってる。

これは一体、どういう事だろう・・・？

私は死んだ筈。なのに死んでない。

数分の思索の末、シタラはある結論に辿り着いた。

そうか——解った！私は一度死んでコンティニューしたんだ！

つまり、これは現実ではない。最新のVRゲームだったのだ！

そうだそうだ！そうに違いない——ッ！控え目に言つて、私：

天才かもね！

シタラは現実逃避も同然の結論を脳内で述べる。

そして、ある事に気付く。

あれ？そういえば、あのお化けは何処に・・・というか、あそこに

窪みってあつたっけ？

少し見てみよう。

シタラは窪みに近付いてそれを見る。

何これ・・・？何かの液体と・・・鉄屑??

この鉄屑は持つておこうかな。殴ればダメージ与えられそうだし。

それはそれとして、あのお化けは恐らくゲーム内のNPC——そ

の内のイベントキャラの1人と見た！

そして、死んだ後にコンティニュー出来た私はこのゲームのプレイ

ヤー・・・そう考えれば辻褄が合う！

なーんだ、そういう事だったんだ！

こんな島で殺し合いなんて絶対おかしいと思ったけど、ゲームなら話は早い！なんていうか、シャードじゃなさそうな感じもしてたし。

うっはー！ー！ー！ー！本当の殺し合いなら先ず勝てる気がしないけど、ゲームなら負ける気がしないね〜！

よーし、頑張ってクリアするぞ〜！！

斯くして、シタラは歩き出した。

ここで、読者の方々に兼志谷シタラがヘラルドに襲われたにも関わらず無事でいられた理由を説明しよう。

兼志谷シタラの支給武器は三つのIUPキノコ。スーパーマリオシリーズでお馴染みのキノコの一種で、取得した者の残機を一つ増やす効果を持つ。そして、シタラは取り出してからすぐに三つとも食べた。

つまるところ、シタラは最序盤から自らの残機を3体増やした為、ヘラルドの銃撃を身体中に受けても残機を1体失うだけで済んだのである。

「女子10番 兼志谷シタラ」

身体能力：C

頭脳：B

武器：無し

スタンス：ゲームクリアを目指す

思考：ゲームの世界w k t k

身体状態：正常、残機2体

精神状態：ゲーム脳

私立黒須学園 3年B組 名簿

「男子01番 ステイング・オークレー」

「男子02番 デイアツカ・エルスマン」

「男子03番 金田一一」

- 〔男子04番 草加拓海〕  
〔男子05番 藤原文太〕  
〔男子06番 シン・アスカ〕  
〔男子07番 アウル・ニード〕  
〔男子08番 碓シンジ〕  
〔男子09番 泉研〕  
〔男子10番 キラ・ヤマト〕  
〔男子11番 ジョン・メイトリックス〕  
〔男子12番 サイ・アーガイル〕  
〔男子13番 ボルガ博士〕  
〔男子14番 遠野志貴〕  
〔男子15番 魔王〕  
〔男子16番 トール・ケーニヒ〕  
〔男子17番 高橋涼介〕  
〔男子18番 風間真〕  
〔男子19番 アスラン・ザラ〕  
〔男子20番 ネコアルク・カオス〕  
〔男子21番 パラガス〕  
〔男子22番 ボンドルド〕  
〔男子23番 スティーヴン・アームストロング〕  
〔男子24番 藤原拓海〕  
〔男子25番 ラウ・ル・クルーゼ〕  
〔男子26番 ミイホン〕  
〔男子27番 レグ〕  
〔男子28番 スラリン〕  
〔男子29番 武内樹〕  
〔男子30番 高橋啓介〕  
〔男子31番 ハイネ・ヴェステンフルス〕  
〔男子32番 ベネット〕  
〔男子33番 白銀武〕  
〔男子34番 スライバ〕



- 〔女子01番 アルクエイド・ブリュンスタッド〕  
〔女子02番 吾妻楓〕  
〔女子03番 遠野秋葉〕  
〔女子04番 赤城〕  
〔女子05番 シエル〕  
〔女子06番 ネコアルク〕  
〔女子07番 キアナ・カスラナ〕  
〔女子08番 比良坂夜露〕  
〔女子09番 加賀〕  
〔女子10番 兼志谷シタラ〕  
〔女子11番 リコ〕  
〔女子12番 フレズヴェルク〕  
〔女子13番 ステラ・ルーシエ〕  
〔女子14番 ラファイー〕  
〔女子15番 翡翠〕  
〔女子16番 轟雷〕  
〔女子17番 ジャベリン〕  
〔女子18番 鑑純夏〕  
〔女子19番 無量塔姫子〕  
〔女子20番 琥珀〕  
〔女子21番 オーゼン〕  
〔女子22番 ブローニャ・ザイチク〕  
〔女子23番 百科文嘉〕  
〔女子24番 ヘラルド〕  
〔女子25番 ステイレット〕  
〔女子26番 綾波レイ〕  
〔女子27番 式波・アスカ・ラングレー〕  
〔女子28番 エンタープライズ〕  
〔女子29番 ガスト〕  
〔女子30番 雷電芽衣〕

〔女子31番 ベルファスト〕

〔女子32番 源内あお〕

〔女子33番 天城〕

〔女子34番 綾波〕

〔女子35番 真希波・マリ・イラストリアス〕

〔女子36番 バーゼラルド〕

生存者、残り66名

### 第3話

殺し合いたくない。

殺し合いなんてしたくない。

男子10番、キラ・ヤマト。

中立コロニー『ヘリオポリス』で平和な生活を送る学生だった。

そして、世界初のスーパーコーディネイターとしてこの世に生を授けた少年でもある。

だが、今の彼の顔は、まるでこの世の終わりを見ているような表情をしている。

もう駄目だ。お終いだ。

あーハイハイ、僕は諦めました。

僕には人を殺してまで生き延びる理由なんて無い。

寧ろ、自分から死んだ方がマシな気がしてきた。

ナイフで刺されたり、銃で撃たれたりする前に自分から死んだ方がマシな気がしてならない。

よし、決めた。

僕はもう自殺する。

大体、僕を殺し合いに参加させるなんてやめてよね。幾ら僕がコーディネイターでも、殺し合いで勝てる訳無いだろ。

……つまり、このテストは自殺志願者にとっての楽園みたいなものじゃないかな。

自殺志願者はこのテストを利用して自殺。企業側は恐らく、テストで何らかの利益を出している筈だから……これってつまりWinWin in!? AS社、万歳!!

……おいおい。このスーパーコーディネイター、自殺を考え出したぞ。

キラはバッグの中を漁り始める。

さーて、僕の支給武器は何かな。

出来れば、苦しむ事も痛みを感じる事もなく自殺出来るのかな? この感触、もしかしてこれかな? ——

キラはスマホのような何かを取り出す。  
それは、アクシズ召喚ビーコンだった。

キラは一緒にバッグに入っていた取扱説明書を読む。  
アクシズ召喚ビーコン。

AS社がとある軍事作戦のシミュレーションデータを基に開発した、文字通り、小惑星基地『アクシズ』を召喚する事の出来る、スマホ型の装置だ。

勿論、ただ召喚するのではない！

大気圏外ギリギリのところ召喚して、その後はこの島に到着する軌道で地球に落ちていくので、到着すればそこにいる人や物は確実に下敷きになって潰れるよ！

しかも、召喚されるアクシズには核弾頭が複数積載されている為、地球寒冷化も可能な悪魔の支給武器だ！

一通り読み終えたキラは狂喜乱舞した。

や、やった！これは今の僕にとって最高の武器じゃないか！！

地球を寒冷化させられる隕石がここに落ちてくるなら、きつと一瞬で楽に死ねる筈！

そーれ、スイッチオン！

キラ、アクシズ召喚ビーコンの画面をタップする！

しかし、ここでキラの予想は外れる事となる。

何も起こらない。

あれ？

キラは何度も画面をタップするが、ビーコンは一向に起動する様子を見せない。

どういう事なの？

これ、画面をタップしてもうんともすんとも言わないんだけど…まさか、不良品!?

キラは何とかしてアクシズ召喚ビーコンを使えるようにしようと、本体を調べ始めた。

原因は単純な事だった。

あっ——これ、バッテリーが切れてるのか！くそっ、くそっ！何

処かで充電しないといけないのか！面倒臭い武器だなあ・・・。

仕方ない、充電出来る所を探そう。

自殺するのも、大変なんだな。

キラはそう思いながら歩き出した。

「男子10番 キラ・ヤマト」

身体能力：S

頭脳：A

武器：アクシズ召喚ビーコン

スタンス：楽に自殺する

思考：取り敢えず充電しよう

身体状態：正常

精神状態：絶望

「ふっふっふ——」

もしもこの島が普通の島で、先進国の大都会に見劣りしないような都市があつたとすれば、高級住宅街が建設されていてもおかしくない、島の大部分をある程度見渡す事が出来そうな丘の上。

そこで、2人の少女が向かい合っていた。

否——2体のフレームアームズ・ガール、と言うべきか。

「遂にこの時が来たわね、バーゼラルド！今日こそどっちが強いか、ここで決めるわよ！」

女子25番、ステイレット。空戦を得意とするフレームアームズ・ガールである。

「ええ〜。ばーぜ、強いよ〜。それに、ここで負けたらこの島に骨を埋める事になっちゃうかもね〜」

対するは女子36番、バーゼラルド。宇宙での戦闘と頭脳戦を得意とするフレームアームズ・ガールである。

なお、本作におけるフレームアームズ・ガールは人間サイズと想っていたらいい。

「それじゃあ、お互い『せーの』でバッグから武器を取り出してバトルセクションスタートよ！どんな武器が入っていても恨みつこ無しだ

から、覚悟しなさい！ま、何が入ってしよう——私が勝つわ!!」  
「ばーぜならどんな武器でもステイレットに勝てる自信あるよ？よし……」

両者共にバッグの中に手を入れる。

「せーの!!」

そして、同時に武器を出した——

——までは良かったが。

「えっ……」

「あれ……?」

ステイレットには厚揚げが、バーゼラルドには籠一杯に入れられたパチンコ玉が支給されていた。

説明するまでもないとは思うが、ステイレットの支給武器である厚揚げは藤原豆腐店で作られたもの……とだけ言っておこう。

「こ、これは予想外だったね。ねえステイレット、これで投げ合っちゃおう?」

「そ、そんな事言ったって……厚揚げとパチンコ玉の投げ合いなんて……凄くシユールじゃない……」

協議の末、2人は……

「なら、この辺りを探索して武器になりそうな物を探すわよ!」

「それじゃあ、見つかるまではセッションはお預けだね」

同盟を結ぶ事となった。

「女子25番 ステイレット」

身体能力：A

頭脳：C

武器：厚揚げ

スタンス：生き延びる

思考：バーゼラルドに会えて良かった!

身体状態：正常

精神状態：正常

「女子36番 バーゼラルド」

身体能力：A

頭脳：B

武器：パチンコ玉

スタンス：生き延びる

思考：ステイレットに会えて良かった！

身体状態：正常

精神状態：正常

何でこんな事になったんだろう。

男子08番、碇シンジは無気力状態に陥っていた。

殺し合えなんて事言われて、目の前で綾波が殺されて・・・何だよこれ——何なんだよ、これ!!

目の前で自分の友達を殺されたらこうなるのが、ある意味において正常と言えよう。

しかし——悲しいかな、現実の時として残酷さを表す事もあるのだ。

皆どうかしてるよ・・・!こんな知らない島で殺し合いなんて、絶対におかしいじゃないか!

ふと、シンジはバグを見る。

そして、何を思ったのか、バグの中を漁り始める。

・・・?

シンジは何かを見つける。

バグから取り出したのは、本だった。

それは、回復系呪文の勉強本だった。

100ページ以上にも及ぶそれには、味方1人を回復させるホイミから幻惑を解くマヌーハまで、回復系の呪文に関する事がびっしりと記されている。

その中のあるものが、シンジの目に留まった。

蘇生編——その中に記されているザオリクという呪文。

これだ。

それが、シンジに希望を与える事となった。

この呪文を習得するには相当な時間がかかりそうだ。下手をすれ

ば1年かかっても・・・

でも、これを習得して、綾波の遺体を見つける事が出来れば――  
綾波を蘇らせる事が出来るかもしれない!

シンジの腹は決まった。

よし、今から勉強を始めるぞ。まずは――

近くの草むらから物音。

「うわあああああ!?!」

シンジは驚き、身体を振るわせた。

な、何だ!?!まさか、殺し合いに乗っている奴がやって来た?もう!?!  
シンジの冷や汗が止まらない。

――来る!!

果たして、シンジの元に現れたのは――

「なんか声がしたけど・・・って、いた!!よ、良かったあゝゝゝ・・・」

「お・・・女の子?」

黄色いリボンを付けた茶髪ポニーテールの少女だった。身長からして、自分より年上なのだろう。

「あ、あの・・・貴女は・・・」

「えっ?あ、ああ!いきなり飛び出しちゃってゴメン!!えーつと・・・  
あつ、そうだ!私の名前は、源内あお!」

女子32番、源内あお。

どこにでもいるような、至って普通の女子高校生だが、最近では、轟雷を始めとするフレームアームズ・ガール達との生活を送っている。

「あの、君の名前は・・・?」

あおがシンジに名前を聞く。

そういえば、僕も自己紹介するの忘れてた。やっておかないとダメだよな。

「・・・碓シンジです」

「そうか、シンジっていうんだ・・・えつと・・・大変な事になっちゃったけど、これからよろしくね!シンジ君!!」

「は、はい・・・」

乗っていないように見えるけど・・・一応、聞いておかないといけ



ない事がある。

「あの、一つ聞いて良いですか？」

「?えーと、何かな?」

「・・・単刀直入に聞きます。あおさんは殺し合いに乗っているんですか?僕は死ぬ訳にはいかない。この殺し合いに乗る訳にはいかないんです」

これだけは聞いておこう。こんな状況になっている以上、殺し合いに乗っている人がいるかもしれない。僕だって、さっきまでは恐怖で押し潰されそうになったんだ。その時の僕によって、そのままパニックになる人だって出てくるかもしれない。

「え——ええ!?わ、私に人なんて殺せる訳無いよ!私、味方が欲しかったの・・・」

予想外の答えに目を丸くするシンジ。

「味方?僕を?」

「うん!シンジ君って良い人なんですよ?殺し合いに乗る訳にはいかないって言うってたし!だったら、一緒に行動してこの島から脱出する方法を探そうよ!」

そうか——その手があった!

「成程・・・それ、良いアイデアですね!じゃあ、力を合わせてこの島から抜け出しましょう、あおさん!」  
「うん!」

こうして、シンジとあおは島から脱出する術を見つける為に動き出すのだった。

待ってて、綾波——君も必ず助ける!!

「男子08番 碇シンジ」

身体能力：D

頭脳：C

武器：回復系呪文の勉強本

スタンス：綾波レイを蘇生して島からの脱出

思考：待ってて、綾波・・・!

身体状態：正常

精神状態：正常

「女子32番 源内あお」

身体能力：E

頭脳：C

武器：モバイルバッテリー

スタンス：島からの脱出

思考：轟雷達とも合流しないと

身体状態：正常

精神状態：正常

「つまり、お爺さんはその男達に攫われて、この島に連れて行かれた・・・と言う訳ですね？」

「うむ・・・」

アパートの一室で、青髪の少女と髭を生やした老人が会話している。

女子05番、シエルと男子13番、ボルガ。

片や聖堂教会の対死専門の異端審問部署『埋葬機関』所属の異端審問官、片や西ドイツの科学者という、普通なら絶対に出会わないような2人。

だが、2人は現にこうして出会っている。

「本当なら、海上工業都市建設の為にレセプションに参加する筈だった。だが、あの男達に遭ってしまったばかりに、このような殺し合いに参加させられてしまっている」

ボルガ博士は無念といった表情でそう言うと、シエルが口を開く。

「そう落ち込まないで下さい。この島から脱出する手立てはある筈です。それさえ見つける事が出来れば、私達2人だけでなく、参加させられた人達の脱出も不可能ではないでしょう」

「・・・！そうか、その手があった！だが、最大の問題はこの首輪だ。これを付けたまま島から出れば、自爆装置が作動するというのは、あの言峰綺礼という男が説明している。それが事実であれば、首輪を付けたまま島から出るのは危険だ。脱出の為に、自爆装置を作動させ

る事無く首輪を外す方法を見つける事が前提——」  
その時だった。

部屋の中に煙が立ち込めてくる。

「……この煙は？」

「まさか——敵!？」

2人は警戒態勢に入る。

煙は充満していき、遂には視界はほぼゼロといえるような状況となった。

これは恐らく煙幕弾——そうになると、敵は懐に入ってきて来る筈！  
姿の見えない敵が近接格闘に持ち込んでくると踏んだシエル。

「うっ——」

シエルの側で一瞬だけ呻き声が聞こえる。

この声は、ボルガ博士——

「どうしました!? そっちに何か出て来て——」

ボルガ博士がいるであろう、その方向に向かう。

「ボルガ博士——ッ!？」

ボルガ博士は既に死んでいた。

首の部分が不自然な曲がり方をしている。首を折られてしまったのである。

しまった——私ではなく、抵抗出来ないボルガ博士を先に狙っていたとは……!

シエルは己の失態を恥じる。

これは、一旦外に出なければ、戦いようがありませんね。

そして、シエルは失念していた。ボルガ博士のバッグが無くなっていた事を——。

シエルの右腕を細い針で刺されたような痛みが襲う。

シエルは半ば反射的に右を向く。

そして、足元を見ると、床にそれが転がっている事に気付いた。

これは——注射器!？」

ま、まさか……

シエルの脳裏に最悪の展開が浮かぶ。

「何処にいるのですか!?!出て来なさい!!」

シエルがそう叫ぶと、その言葉に応えるように、何処からともなく声が聞こえた。

「ダメだよ、そんなに怒ったら。じゃないと身体に悪いよ?」

女の子の声?しかも——私よりも若い!?

「ほら、ニコって笑おう。そうすれば、きつと良い事が起きるから。そうだ、この島から出たらアビスを探検しよう!こんな事になっちゃったけど、オースに戻れば、アビスに行ける!」

アビス——深淵??それに、オース——

突如として、シエルの身体から力が抜けていく。

そんな・・・身体が動かなくなつて・・・何も・・・出来ない、ま  
ま——

シエルは倒れる。

それを最後に、シエルの身体が動く事は無かった。

煙が薄れていく。

部屋の中には、シエルとボルガの遺体。

そして、金髪ツインテールの少女がいた。

その身長から、小学生か中学1年生とも思つてしまいそうだ。実際、年齢がそうだが。

女子11番、リコ。

オースに暮らす、アビスに対する憧れを抱く少女であり、白笛の1人であるライザの娘。

先程の煙は、彼女の支給武器である煙幕手榴弾によるものだったのだ。

そして、リコが右手に持つ箱。

それは、ボルガ博士の支給武器である毒物セットだ。

リコは、シエルの側に転がっている注射器を回収する。

シエルのバッグから水の入ったペットボトルとヒドラジンの入ったタンクを取り出し、自分のバッグに入れると、リコは部屋を出て、アパートを後にした。

「女子11番 リコ」

身体能力：B

頭脳：B

武器：煙幕手榴弾

毒物セツト

ヒドラジン

スタンス：

思考：

身体状態：正常

精神状態：正常・・・？

〔男子13番 ボルガ 死亡〕

〔女子05番 シエル 死亡〕

私立黒須学園 3年B組 名簿

〔男子01番 ステイング・オークレー〕

〔男子02番 デイアツカ・エルスマン〕

〔男子03番 金田一一〕

〔男子04番 草加拓海〕

〔男子05番 藤原文太〕

〔男子06番 シン・アスカ〕

〔男子07番 アウル・ニーダ〕

〔男子08番 碓シンジ〕

〔男子09番 泉研〕

〔男子10番 キラ・ヤマト〕

〔男子11番 ジョン・メイトリックス〕

〔男子12番 サイ・アーガイル〕

〔男子13番 ボルガ〕

〔男子14番 遠野志貴〕

〔男子15番 魔王〕

〔男子16番 トール・ケーニヒ〕

〔男子17番 高橋涼介〕

〔男子18番 風間真〕

〔男子19番 アスラン・ザラ〕

〔男子20番 ネコアルク・カオス〕

〔男子21番 パラガス〕

〔男子22番 ボンドルド〕

〔男子23番 スティーヴン・アームストロング〕

〔男子24番 藤原拓海〕

〔男子25番 ラウ・ル・クルーゼ〕

〔男子26番 ミイホン〕

〔男子27番 レグ〕

〔男子28番 スラリン〕

〔男子29番 武内樹〕

〔男子30番 高橋啓介〕

〔男子31番 ハイネ・ヴェステンフルス〕

〔男子32番 ベネット〕

〔男子33番 白銀武〕

〔男子34番 スライバ〕

〔女子01番 アルクエイド・ブリュンスタッド〕

〔女子02番 吾妻楓〕

〔女子03番 遠野秋葉〕

〔女子04番 赤城〕

〔女子05番 シエル〕

〔女子06番 ネコアルク〕

〔女子07番 キアナ・カスラナ〕

〔女子08番 比良坂夜露〕

〔女子09番 加賀〕

〔女子10番 兼志谷シタラ〕

〔女子11番 リコ〕

〔女子12番 フレズヴェルク〕

〔女子13番 ステラ・ルーシエ〕

- 〔女子14番 ラフィー〕
- 〔女子15番 翡翠〕
- 〔女子16番 轟雷〕
- 〔女子17番 ジャベリン〕
- 〔女子18番 鑑純夏〕
- 〔女子19番 無量塔姫子〕
- 〔女子20番 琥珀〕
- 〔女子21番 オーゼン〕
- 〔女子22番 ブローニャ・ザイチク〕
- 〔女子23番 百科文嘉〕
- 〔女子24番 ヘラルド〕
- 〔女子25番 ステイレット〕
- 〔女子26番 綾波レイ〕
- 〔女子27番 式波・アスカ・ラングレー〕
- 〔女子28番 エンタープライズ〕
- 〔女子29番 ガスト〕
- 〔女子30番 雷電芽衣〕
- 〔女子31番 ベルファスト〕
- 〔女子32番 源内あお〕
- 〔女子33番 天城〕
- 〔女子34番 綾波〕
- 〔女子35番 真希波・マリ・イラストリアス〕
- 〔女子36番 バーゼラルド〕

生存者、残り64名

## 第4話

島の中央に聳え立つAperitureScienceツインタワービル——その中のある部屋に、言峰綺礼はいた。

「・・・と言う訳でございます、私立黒須学園3年B組の生徒は問題無くテストを開始しました。既に6名の参加者が死亡。ここまでは順調でございます」

「うんうん、報告ありがとうね！いやあく、殺し合いを観るのはとても楽しいだも！」

「はい、会長！生意気な人達がヒーコラ言いながら亡くなっていく光景は、ストレス発散にはうってつけですね！」

豪華なソファーに座って言峰と話しているのは、たぬきグループの会長であるたぬきちと、たぬきちの秘書であるしずえである。

AperitureScienceは、たぬきグループの傘下企業なのだ。

「折角こんなに人を集めたんだから、一杯苦しんでほしいね！」

「はい！今回は特別な武器を沢山用意しましたので、きつと派手に殺し合っている事でしょう！ところで、VIPルームのギャンブルはどうなっていますか？」

「ええ、そちらも大変盛り上がっております。ある方々はビル内の高級レストランで食事を取りつつ、テストの観戦を楽しんでおります。また、ある方々は屋上のプールでお楽しみになりつつ、テストを観戦なさっております。生徒1人1人に注目し、各々の行動映すシアタールームですが、まだ最序盤で、男女共に人気のある参加者が生きていると言う事もあり、男子参加者を対象とした部屋も女子参加者を対象とした部屋も人気があります。そして、カジノルームですが、やはり他の部屋よりも盛り上がっております。誰が勝つのか予想が付かないように、大変観戦に熱くなっております」

「殺し合いを観られるし、お金も儲かるし、とてもボロい事業だも！前の職場を抜け出して起業して、この国でテストを執り行える場所を作って本当に良かったね！」



「会長は天才です！今回も、盛り上がる殺し合いを見せていただきましたね！」

たぬきちとしずえは笑い声を上げた。

その後、たぬきちはふとこんな疑問を口にした。

「あれ？今回は禁止エリアの設定とかはしないんだなも？」

その問いに対するしずえの答えはこうだった。

「あつ、それなら何処かのお馬鹿さんが参加者さん達のバッグに地図を入れるのをうっかり忘れてしまったそうなので、今回は無しと言う事になりました！」

言峰、テメエーーーーーッ！！

これが・・・こんなのが、本当にあつたなんて——！！

武はバッグから取り出したそれを見て、目を見開いていた。

武の支給武器はデスノート。

顔と名前を知っている者の名前を書く、その相手が死ぬ。

まさに、死神のノートだ。

マジか——！俺の支給武器がこんなチート級の代物なんて！！

名前を書くだけで相手を殺す事が出来る!?おいおい、これっでもう俺が実質的なゲームマスターになったも同然じゃねーか!!

あれ？こうなったら、俺もうこのテストで一番有利な立場に——

——って、あれ？ちよつと待てよ??

俺以外の参加者って——

あ、ああ——

ああああああああ。

武はデスノートを持ちながらしゃがみこんだ。

よくよく考えたら、俺は俺以外の全員の参加者の名前を知らない。

何人かの顔は見たけど、だからと言って、名前を知っている訳じゃない。

寧ろ、いの一番に俺が呼ばれたせいで、俺の名前が他の参加者全員の記憶に強く残っている可能性がある。

それを考えると・・・俺はこのノートを使う事が出来ないど

ころか、ノートを他人に奪われてもいけないって事か——。

「タケルちゃん……?」

背後から声が聞こえる。

武は、またも驚愕する。それも、先程とは別の意味で。

何故なら……その声は、武のよく知る人の声だったのだから。

心拍数上がる。

武は恐る恐る後ろに振り向く。

そこにいたのは——

「す——純夏!?!」

「やっぱりタケルちゃんだ——!!」

白銀武の幼馴染——女子18番、鑑純夏。

右手には、銀色の剣が握られている。

メタルキングの剣。

鏢にメタルキングの彫刻が刻まれているこの剣は、今回のテストにおける支給武器、その内の近接武器の中では最強クラスに入る。

更に、この剣は店では売られていない、大変貴重な代物である。

「良かった——!タケルちゃんに逢えて良かったよ——!!」

「純夏だって、なんでこんな所にいるんだ!?まさか、お前までこんなのに参加させられたのか!?!」

「そうみたいなの!さっきのホールで周りを見た時、知らない人ばかりで——どうしたら良いのか分からなくて……うわあああ——くん!!」

純夏は武に抱き着く。

自分のみならず、純夏までテストに参加させられていた。

その事実が、武にショックを与えていた。

だが、これが武に決意を抱かせる事にもなった。

純夏を守る。いや——純夏だけじゃない。

名前も知らないけど、出来る事なら、他の参加者達も守りたい。

「男子33番 白銀武」

身体能力：A

頭脳：B

武器：デスノート

スタンス：純夏や他の参加者達と共に島からの脱出

思考：純夏——今度こそ、守ってみせる！

身体状態：正常

精神状態：正常

「女子18番 鑑純夏」

身体能力：B

頭脳：C

武器：メタルキングの剣

スタンス：生き延びる

思考：タケルちゃんに逢えて良かった

身体状態：正常

精神状態：正常

何だコイツ・・・!?

男子30番、高橋啓介は自分の支給武器を見てそう思った。

啓介の支給武器はガネーシャ。兼志谷シタラ専用のアリスギアである。

アリスギア。

本来であれば、エミツション適性を持つ女性以外の人間が操縦する事は出来ないが、このテストに支給されたガネーシャはショットギアとクロスギアもセットになっている上、エミツション適性の有無に係無く、誰でも操縦可能な仕様となっている。

尤も、一部の例外は除くものとするが。

それはそれとして、こういうタイプの代物を見たことが無い啓介にとっては、まさに未知の武器であるの言うまでもない。

銃か剣でも支給されるのかと思ったが、まさかこんなのを引くなんてな・・・。

まあ、とりあえず・・・って、どうやって装備するんだ？説明書は

——あつた！これが無きや、装備のしようがねえからな。

啓介は説明書の通りにガネーシャを装備していく。

数分後――

啓介は、何とかガネーシヤを装備し終えた。

だが・・・

「ズボン脱ぐ羽目になるなんて、聞いてねえぞ!!」

啓介の下半身は、ガネーシヤのボトムスを穿いている点を除けばパンツ一丁の状態となってしまうた。

それよりも、啓介はAS社に対する怒りに燃えていた。

つーか、こんな島で殺し合えだなんて、ふざけんな、あの神父野郎!!今すぐにもぶつ潰しに――って、行動を起こすにはまだ早いよな。アニキなら、あの何とかサイエンスって連中とやり合えるような作戦を練られる筈だし、まずはアニキを捜して合流するか。

啓介は、方針を決めると空中移動を開始した。

「男子30番 高橋啓介」

身体能力：B

頭脳：C

武器：ガネーシヤ

スタンス：AS社をぶつ潰して島からの脱出

思考：アニキと合流しねーと。つーか、パンツ一丁はねーだろ・・・

身体状態：正常

精神状態：正常

男子28番、スラリンはスーラン王国の王子である。

妹のスラミ、友達のミイホンとドラおと共に、今日まで自由奔放かつ平和な生活を送っていた。

今日までは。

だが、今では知らない島に連れて行かれ、自分とミイホンと知らない人68名の計70名で殺し合いをさせられている。

うわあぁん・・・ボク、悪いスライムじゃないのに、どうしてこうなったの・・・。

スラリンは今、崖の上の民家のリビングで蹲っている。

そ、そうだ!戦いを止めて、皆で島から脱出するっていうのはどう

かな？あつ、でもそうなるよこの首輪を如何にかしないと——  
そう思っていた時だった。

突如、視界が暗転する。

「えっ——え、ええええええ!!」

急な出来事にスラリンは混乱する。

暗闇の外側から物音が聞こえる。どうやら、テープのような物を貼っているようだ。

何なの、これ!?

更に、その直後にスラリンが暗闇ごと揺れ始める。

うわああーん!! 本当に何なの!?! 突然、周りが暗くなる! 周りから物音が聞こえる! 今度は凄く揺れる——あれ?

スラリンは急に冷静になる。

もしかして、ボクが今いるのは箱か何か? という事は、ボクは誰かにそれに入れられて、何処かに運ばれているんだ!

今、この中から飛び出たら危ないかも——

刹那——揺れが収まり、スラリンは自分が浮くような感覚を覚えた。

数秒、その不可思議な感覚は続いていたが、それも終わりを迎える。  
冷たい感触。

水が入ってきたのである。

うわあ! み、水——つて、辛っ! 塩辛いよ!?! と、とにかく脱出しなと!!

スラリンは何とかして脱出しようとする。

だが、もう遅い。

スラリンが海面からその姿を出す事は、二度と無かった。

「男子28番 スラリン 死亡」

ニヤツニヤツニヤツ——段ボールも知恵を使えば、案外良い武器にニヤるとは。

一匹の猫が、崖の上から海面を見下ろしていた。

男子20番、ネコアルク・カオス。

ハリウッドに憧れるナマモノであり、支給武器である段ボールを用いてスラリンを殺した張本人でもある。

なお、スカートを着いているが、性別は男性と誤っていたらききたい。ネコカオスは、スラリンが先程までいた民家に入る。

「さて、あのゼリーボーイの武器は——おお、これは!!」

ネコカオスはそれを見て歓喜する。

スラリンの支給武器はM134。M61バルカンの小型軽量版で、口径は7.62mm。開発経緯から、『ミニガン』の愛称でよく知られている。

一般的なライフルと同じ口径で、尚且つ連射性能も非常に高い為、銃火器としては凄まじいダメージソースを誇るが、反動も凄まじいので、発砲の際には注意が必要である。

これは、さっきのゼリーボーイが先に取り出していなくてラッキーだったニヤ。取り出されていたら段ボールの中に閉じ込められなかっただろうし。

待つてろハリウッド。吾輩はこのテストを制し、必ずやその地へ行く。

ネコカオスはハリウッドへの想いを胸に、ミニガンを持って民家を後にした。

「男子20番 ネコアルク・カオス」

身体能力：B

頭脳：B

武器：M134

スタンス：優勝してハリウッドへ行く

思考：次の相手を探す

身体状態：正常

精神状態：正常

私立黒須学園 3年B組 名簿

「男子01番 ステイング・オークレー」

「男子02番 デイアツカ・エルスマン」

- 〔男子03番 金田一一〕
- 〔男子04番 草加拓海〕
- 〔男子05番 藤原文太〕
- 〔男子06番 シン・アスカ〕
- 〔男子07番 アウル・ニーダ〕
- 〔男子08番 碓シンジ〕
- 〔男子09番 泉研〕
- 〔男子10番 キラ・ヤマト〕
- 〔男子11番 ジョン・メイトリックス〕
- 〔男子12番 サイ・アーガイル〕
- 〔男子13番 ボルガ〕
- 〔男子14番 遠野志貴〕
- 〔男子15番 魔王〕
- 〔男子16番 トール・ケーニヒ〕
- 〔男子17番 高橋涼介〕
- 〔男子18番 風間真〕
- 〔男子19番 アスラン・ザラ〕
- 〔男子20番 ネコアルク・カオス〕
- 〔男子21番 パラガス〕
- 〔男子22番 ボンドルド〕
- 〔男子23番 スティーヴン・アームストロング〕
- 〔男子24番 藤原拓海〕
- 〔男子25番 ラウ・ル・クルーゼ〕
- 〔男子26番 ミイホン〕
- 〔男子27番 レグ〕
- 〔男子28番 スラリン〕
- 〔男子29番 武内樹〕
- 〔男子30番 高橋啓介〕
- 〔男子31番 ハイネ・ヴェステンフルス〕
- 〔男子32番 ベネット〕
- 〔男子33番 白銀武〕

〔男子34番 スライバ〕

〔女子01番 アルクエイド・ブリュンスタッド〕

〔女子02番 吾妻楓〕

〔女子03番 遠野秋葉〕

〔女子04番 赤城〕

〔女子05番 シエル〕

〔女子06番 ネコアルク〕

〔女子07番 キアナ・カスラナ〕

〔女子08番 比良坂夜露〕

〔女子09番 加賀〕

〔女子10番 兼志谷シタラ〕

〔女子11番 リコ〕

〔女子12番 フレズヴェルク〕

〔女子13番 ステラ・ルーシエ〕

〔女子14番 ラフィー〕

〔女子15番 翡翠〕

〔女子16番 轟雷〕

〔女子17番 ジャベリン〕

〔女子18番 鑑純夏〕

〔女子19番 無量塔姫子〕

〔女子20番 琥珀〕

〔女子21番 オーゼン〕

〔女子22番 ブローニャ・ザイチク〕

〔女子23番 百科文嘉〕

〔女子24番 ヘラルド〕

〔女子25番 ステイレット〕

〔女子26番 綾波レイ〕

〔女子27番 式波・アスカ・ラングレー〕

〔女子28番 エンタープライズ〕

〔女子29番 ガスト〕



〔女子30番 雷電芽衣〕

〔女子31番 ベルファスト〕

〔女子32番 源内あお〕

〔女子33番 天城〕

〔女子34番 綾波〕

〔女子35番 真希波・マリ・イラストリアス〕

〔女子36番 バーゼラルド〕

生存者、残り63名

## 第5話

彼は少年型ロボットである。

今はいつの間にか着せられた制服で殆ど隠れているが、明らかに金属のようなもので出来ているような見た目の四肢がその証拠だ。

更に、両腕は射出出来る上に全長40m前後ものワイヤーを備える他、この島では撃てないが、掌部と足裏に射線上にある物全てを消し飛ばす火葬砲を備えている。

ロボットならではの魅力が盛り沢山だ。

だが、顔や胴体（内臓や男性なら絶対に持っているであろうアレがある事も含む）が人間とそっくりである点、人間と同様に食事を取る事が出来る点はロボットならではの魅力だろうか。

そうだとするのであれば否定はしない。人間たるもの、センスは皆違つて皆良い。そういうものは千差万別なのだから。

ロボットならではの魅力を多く兼ね備えた男子27番、レグは南南西に民家のある崖が見える山の麓でバッグを漁っていた。

「僕の武器は何だろうか？ふわふわしたもの・・・いや、流石に今回は不味い方だ。殴るのに適したものが良いか」

ふと、バッグから水でも食料でもない、奇妙な形の眼鏡が出て来た。それはスカウターだった。

これを装着・起動した状態で相手を見ると、対象の名前と戦闘力が表示される、云わば情報収集系の武器である。

レグは取扱説明書を見ながらスカウターを装備する。

これは、えくつと・・・何ていうか、度し難くないというか・・・かと言って、とびきり強力な武器と言う訳でもないか・・・？まあ、相手の名前と戦闘力を見る事が出来るなら、悪くはないか。弱そうな人でも、強力な武器を持っていれば戦闘力が高く表示されるみたいだし。

レグは辺りを見回す。

それにしても、この上り道は度し難い・・・あぜ道でも石で舗装された道でもないようだけど、何処か近代的な感じだ。寧ろ、度し難さ

を感じるのには近代的な感じのする道にしてはかなり古びたような……  
まるで、何年も整備されていないような——

それが、この島の北西部に位置する山に舗装されたアスファルトの  
古い道路に対するレグの第一印象だった。

もしかしたら、この道を辿ると何かあるのかもしれない。リコの事  
も心配だ。

レグは道に沿って歩き始めた。

「男子27番 レグ」

身体能力：A

頭脳：C

武器：スカウター

スタンス：生き延びる

思考：上り道に沿って進んでみる

身体状態：正常

精神状態：正常

ウフフフフ……こういうのも支給されるのね。てつきり、私には  
重桜刀か三八式歩兵銃が支給されるのかと——

茶髪赤眼、そして狐耳が特徴的な女子04番、赤城は戦いに対する  
美学を持っている。

本人曰く、戦いとは『傷付ける事、傷付く事、痛みを交換する事』。  
そういう独自の価値観を持っているのである。

そんな赤城は、自分の支給武器を見ながら妖しげな笑みを浮かべて  
いた。

「アハハハハッ！」

だが、それは突然の笑い声により、中断を余儀無くされる。

あら——？誰かしら、こんな笑い声を上げるのは——

赤城は声のした方向に視線を向ける。

視線の先には、茶髪碧眼の少年がいた。

「僕は愛と正義のヒーロー、チャージマン研だ！人々からはジュラル  
星人キラーと呼ばれている!!」

昭和のヒーローものでありそうな決め台詞を言い放ったのは、男子09番、泉研だった。

この子、初対面の人に何様のつもりかしら——って、私は人間じゃなくてKAN—SENなのだけれど。まあいいわ。丁度、この武器の力を試してみたかったところよ。

赤城は警戒されないうよう、ゆっくりと研に近付く。

「あら、貴方が・・・チャージマン、研君なの？ウフフ・・・可愛い♡」  
「えっ!?!えへへへ〜〜〜」

赤城の言葉に、研は気を良くする。

そして、赤城が研に抱き付いた瞬間。

研に異変が起こった。

赤城はそれに怯む様子も見せず、ゆっくりと立ち上がる。

一方の研は動く気配を見せない。先程まで青かった瞳は、赤くなっている。

そして、研の腹部に筒状の小さい物体が刺さっている。

ウフフフフ・・・フハハハハ！引つ掛かってくれてありがとう、研君！こんなにすんなり騙されてくれるなんて！

ここで、赤城の支給武器について説明しよう。

赤城の支給武器はダミーシステム。本来は汎用人型決戦兵器『エヴァンゲリオン』用の無人制御システムとして開発されたものなのだが、このテストにおいて支給されたのは、使用者が他の参加者を操るという運用方法に落とし込んだものである、そう取扱説明書に書かれていた。また、赤城が研に刺したのはダミープラグである。

そして、赤城の服装に注目してほしい。

今の赤城の服装は、一見すると他の参加者と変わりない制服姿のようだが、首元辺りをよく見てみると、制服の下に黒い何かを着込んでいるのが分かる。

そう、これはダミーシステムを使用する為に作られた専用プラグスーツ。喋って命令するだけでなく、テレパシーを使って命令する事も可能で、ダミープラグを刺された状態で命令を受けた者はその通りに動くのである。

研を支配下に置いた赤城は、試しに声を出して命令する。

「私の名前は赤城。さあ、少年——貴方の名前を教えなさい。そして、私に武器を差し出し、私忠誠を誓うのよ」

「はい、赤城様。僕の名前は泉研。貴女に絶対の忠誠を誓う者です」

赤城の言われる通りに、研は自分の名前を言い、支給武器と思しき鏡を差し出した上で、赤城に忠誠を誓う。

「それなら、次は・・・ジュラル星人とは、何かしら？」

「はい、赤城様。ジュラル星人とは、地球侵略を目論む悪の宇宙人。加えて、人間の姿に擬態する能力を持っていますが、鏡やカメラのフアインダー等に映らないので、見破る事が出来ず」

は——？人間の姿に擬態出来る!?そんなのが存在——って、鏡やカメラのフアインダーに映らないなら、さつきこの研っていう子から貰ったあの鏡があるなら大丈夫。そもそも、この島では特殊能力が使えないから、擬態も出来ないわ。

気を取り直し、赤城は脳内で命令を出す。

前進、後退、側転、ムーンウォーク、ブレイクダンス、連邦に反省を促すダンス。

赤城が脳内で命じた一連の動きを、研は的確に行った。

これは良いわね——それに・・・研君って、思いの外、身体能力が高いわね。これだけ動いても息が乱れていない。ただのヒーロー気取りって訳ではないみたい。

戦いのついでのお楽しみ・・・と言うべきかしら？ウフフフフフフフフ——！

赤城は歩き出す。その後を追うように、研も歩き出した。

「男子09番 泉研」

身体能力：A

頭脳：E

武器：無し

スタンス：ジュラル星人は皆殺し

思考：身体が勝手に——くっそー、ジュラル星人だったか！

身体状態：赤城の制御下

精神状態：発狂

「女子04番 赤城」

身体能力：A

頭脳：A

武器：ダミーシステム

ラーの鏡

スタンス：戦いを楽しむ

思考：こうして見てみると、研君って本当に可愛いわ

身体状態：正常

精神状態：正常

「ええ!? 藤原さんって、豆腐屋なんスか!？」

「あ、ああ。そんなに驚く事か、夜露ちゃん?」

相手が豆腐屋である事を知り、驚愕するピンク色の髪の少女。それに対し、少女のリアクションに少々戸惑うのは中年の男。

女子08番、比良坂夜露と男子05番、藤原文太。

成子坂製作所に属するアクトレスと藤原豆腐店の店主である。

夜露は制服のカーディガンを脱いでいる代わりに、戦車を彷彿とさせるパワードスーツのようなものを制服の上から装着している。

夜露の支給武器は轟雷のアーマーユニット。全身に纏うように装着する為、バランスの良い防御性能を持つ。更に、固定武装として右肩部に滑腔砲を、左腿部アーマーにタクティカルナイフを備える為、攻守共に強力な武器といえるだろう。

対する文太は、若干古めかしい拳銃を持っている。

文太の支給武器はシングルアクションアーミー。西部開拓時代から使われている回転式拳銃で、現在でも生産されている。リボルバー・オセロットが愛用していた事でも有名だ。

「だって、見慣れない制服を着させられた上で殺し合いをさせられるなんて事になったら、全員が私と同じくらいの年の人達って思っちゃうじゃないっスか」

「そりゃそうだが、実際に俺までこの島に連れて来られてる事だし

な・・・」

「とにかく、あの人達の事は絶対に許せないっす！こうなったら、気合でさっきのビルに突入して——」

「待て待て、夜露ちゃん！まだ早まらない方が良い！」

文太は、躍起になる夜露を必死に制止する。

「確かに、この島から脱出する事を考えるなら、絶対にあのビルを攻め落とさなきゃならん。そうなれば、相当な戦力がどうしても必要になってくる。幾ら俺達が、その鎧みたいなのや銃を持っていたとしても、2人だけじゃたかが知れてるって事だ。少なくとも、行動を起こすにはまだ早い」

「そ、そんな・・・」

文太の忠告に、夜露はがっかりした表情になる。それを見た文太は続けて言う。

「だが、俺達と同じ事を考えている奴がいなくても限らん。ソイツ等を仲間にするれば、勝機はあるんじゃないか？」

「あつ——！そうか、他にもいる可能性もあるんだ！」

「まあ、そういう事だ。先ずは俺達に協力してくれる——殺し合いに乗っていない参加者を捜す。話はそこからだ」

「分かりました！それじゃ、よろしくお願いします、藤原さん！」

「こちらこそな」

夜露と文太は自分達の方針を固めた。

「男子05番 藤原文太」

身体能力：C

頭脳：A

武器：シングルアクションアーミー

スタンス：島からの脱出

思考：出来る限り戦力を増強したい

身体状態：正常

精神状態：正常

「女子08番 比良坂夜露」

身体能力：B

頭脳：D

武器：轟雷のアーマーユニット

スタンス：島からの脱出

思考：仲間が出来て嬉しいっす！

身体状態：正常

精神状態：正常

俺が勇者だ。

男子26番、ミイホンは以前からそう思っている。それは、今も変わらない。

水色の頭にそこから生えた何本もの黄色い触手、そして赤いマフラーが特徴的だ。

死ぬなよ、スラリン——お前に勝つのは俺一人で十分だからな!!  
ミイホンとスラリンはとても仲が良い。それ故、ミイホンはスラリンと自分で雌雄を決する時が来るまで死ぬ訳が無いという強い自信を持っている。

そして、こう思った。

俺とスラリンがこの島に連れて来られたって事は——この島が決戦の地って訳だな!

こうしちやいらねー! アイツ等・・・確か、アパー・・・何だっけ? アパー何とかっていう奴らを倒して——

その時である。

突如、ミイホンの眼前に人影が飛び出て来た。

「うわあああ?」

急な出来事に、ミイホンは思わず声を上げる。

人影の正体は大男だった。差し詰め、『筋肉モリモリマッチョマンの変態』と呼ぶべきか。

大男——男子11番、ジョン・メイトリックスは気が立っているのか、怯むミイホンを見るや否や、素手でミイホンの頭を鷲掴みにする。

何だ何だ!? 何をやる気な——いや、待てよ?!



だが、ミイホンはニヤリと笑う。

「へ・・・へへへ・・・おいオツサン、行き成り出て来て何をするかと思えば、俺に近付いちまうとはな。武器も持たないで、すぐに攻撃なんて事しなけりや、警告の一つくらいしてやったのに・・・お前、もう終わりだぜ」

「——？なら、試してみるか？俺だって元・コマンドーだ。ついにて言っておくが、お前を握ってんのは左手だ。利き腕じゃないんだぜ」  
ミイホンが突然発したその言葉を聞いたメイトリックスは、脅しを兼ねてそう切り返す。

だが、メイトリックスは気付かなかった。ミイホンの触手の一つが、ミイホンのバッグからある物を取り出していた事を・・・。

———今だ！

「喰らえ！これが俺の新たなる力だ!!」

その触手の上に乗せられているのは缶詰だった。

ミイホンは、自分の別の触手を用いてそれを開けた。

メイトリックスの視線が缶詰に向けられる。

「何で缶詰が新たなる力なんだ？コメディイショーの道具にしか見えないのに———ッ!?!」

とある現象が、メイトリックスに牙を剥いた。

自身を襲う謎の現象に、メイトリックスは半ば反射的に数歩後退する。

「こ、この臭いは———!?!臭過ぎて、息も出来ん———これは一体、何なんだ———!?!」

「そうーこれはシユールストレミング！世界一臭い食べ物だ！お前がどれ程の力を持っていようが、この臭いが相手じゃどうする事も出来ねー！相手を侮った事そのものが、お前の敗因だー！ー!!」

ミイホンは勝ち誇った表情でそう叫ぶ。

ここで、ミイホンの支給武器であるシユールストレミングについて、少々ではあるが、補足を付け足させてもらう。

スウェーデン語で、スールは「酸っぱい」を、ストレミングは「バルト海産のニシン」を意味する。つまるところ、シユールストレミン

グの中身は、簡単に言えば、酸っぱいニシンと言う事である。

「ば、馬鹿な——だが、それだと一つ疑問が残る。何故、お前はガスマスクも無しに無事でいられるんだ!？」

メイトリックスが投げかけた、核心を突いた問いに対し、ミイホンは余裕綽々といった様子でこう答える。

「ああ、そこ？簡単な事だぜ。だって、俺どころかスライム族は皆、鼻がねーんだもん」

「ふざけやがってええええッ——!!!」

ミイホンの口から語られたシンプルかつとんでもない絡繰りの内容に激昂したメイトリックスは、残された最後の力を振り絞り、ミイホンに肉薄する。

「御大層な筋肉なんかを見せびらかしてないで、相手の特性を把握してから仕掛けるべきだったな！そくれ、止めにもう1個だ!!」

「な——ッ!？」

ミイホンはたった今、二つ目のシュールストレミングの蓋を開いた。それも、先程よりもメイトリックスの顔面に近い所で。

最早、メイトリックスは声を出す事すら出来なくなっていた。

そして——

メイトリックスは自分の背後の湖に落ちた。

メイトリックスが水面からその姿を現す事は無かった。

へっへっへっ、これで筋肉オツサンの始末は完了っつと！

ミイホンは視線を自分のバッグに向ける。

バッグの中には、1日分の水と食料、コンパスにライト、筆記用具、そして十数個のシュールストレミングが入っている。

缶詰はまだまだある——これさえあれば、俺って最強だなー！まあ、スラリン相手には使わないけど。

ミイホンは移動を開始しようとする。

ふと、触手に何かが当たる感触を覚える。

おっ？これは——ジョン・メイトリックス……？そうか、あの筋肉オツサンの名前がジョン・メイトリックスで、これがメイトリックスが持っていたバッグか！

これを置いて、湖に落ちてくれてありがとな、メイトリックスのおっさん！それじゃ早速、中身を見てみるか——

ミイホンは嬉しさを抑えてバッグの中身を確認する。

入っていたのは、RX-78-2ガンダムのパラモデルだった。1/144スケール、HGである。

前言撤回。

期待に満ち溢れていたミイホンの目は、すぐさま死んだ魚のそれへと変貌を遂げた。

ちえつ、期待して損したぜ〜！この島で、こんなパラモデルなんか、何の役にも立たねーじゃねーか！アパー何とかって奴ら、本当に何考えてんだよ・・・!!

一応、水と食料と一緒に貰っておくけど。

一通りの作業を終えたミイホンは、今度こそ移動を始めた。

〔男子26番 ミイホン〕

身体能力：C

頭脳：D

武器：シユールストレミング 13個

1/144 HG ガンダム

スタンス：アパー何とかを倒してスラリンと決着を付ける

思考：飛び道具持ちには気を付けよう

身体状態：正常

精神状態：正常

〔男子11番 ジョン・メイトリックス 死亡〕

私立黒須学園 3年B組 名簿

〔男子01番 ステイング・オークレー〕

〔男子02番 デイアツカ・エルスマン〕

〔男子03番 金田一一〕

〔男子04番 草加拓海〕

〔男子05番 藤原文太〕

- 〔男子06番 シン・アスカ〕
- 〔男子07番 アウル・ニード〕
- 〔男子08番 碓シンジ〕
- 〔男子09番 泉研〕
- 〔男子10番 キラ・ヤマト〕
- 〔男子11番 ジョン・メイトリックス〕
- 〔男子12番 サイ・アーガイル〕
- 〔男子13番 ボルガ〕
- 〔男子14番 遠野志貴〕
- 〔男子15番 魔王〕
- 〔男子16番 トール・ケーニヒ〕
- 〔男子17番 高橋涼介〕
- 〔男子18番 風間真〕
- 〔男子19番 アスラン・ザラ〕
- 〔男子20番 ネコアルク・カオス〕
- 〔男子21番 パラガス〕
- 〔男子22番 ボンドルド〕
- 〔男子23番 スティーヴン・アームストロング〕
- 〔男子24番 藤原拓海〕
- 〔男子25番 ラウ・ル・クルーゼ〕
- 〔男子26番 ミイホン〕
- 〔男子27番 レグ〕
- 〔男子28番 スラリン〕
- 〔男子29番 武内樹〕
- 〔男子30番 高橋啓介〕
- 〔男子31番 ハイネ・ヴェステンフルス〕
- 〔男子32番 ベネット〕
- 〔男子33番 白銀武〕
- 〔男子34番 スライバ〕
- 〔女子01番 アルクエイド・ブリュンスタッド〕

- 〔女子02番 吾妻楓〕  
〔女子03番 遠野秋葉〕  
〔女子04番 赤城〕  
〔女子05番 シエル〕  
〔女子06番 ネコアルク〕  
〔女子07番 キアナ・カスラナ〕  
〔女子08番 比良坂夜露〕  
〔女子09番 加賀〕  
〔女子10番 兼志谷シタラ〕  
〔女子11番 リコ〕  
〔女子12番 フレズヴェルク〕  
〔女子13番 ステラ・ルーシエ〕  
〔女子14番 ラファイー〕  
〔女子15番 翡翠〕  
〔女子16番 轟雷〕  
〔女子17番 ジャベリン〕  
〔女子18番 鑑純夏〕  
〔女子19番 無量塔姫子〕  
〔女子20番 琥珀〕  
〔女子21番 オーゼン〕  
〔女子22番 ブローニャ・ザイチク〕  
〔女子23番 百科文嘉〕  
〔女子24番 ヘラルド〕  
〔女子25番 ステイレット〕  
〔女子26番 綾波レイ〕  
〔女子27番 式波・アスカ・ラングレー〕  
〔女子28番 エンタープライズ〕  
〔女子29番 ガスト〕  
〔女子30番 雷電芽衣〕  
〔女子31番 ベルファスト〕  
〔女子32番 源内あお〕

〔女子33番 天城〕

〔女子34番 綾波〕

〔女子35番 真希波・マリ・イラストリアス〕

〔女子36番 バーゼラルド〕

生存者、残り62名

## 第6話

「その君、ちよつといいかな?」

男子03番、金田一を呼び止める声がした。

金田一が、声のした方向を向くと、そこに中年金髪の仮面の男が立っていた。

「私の名はラウル・クルーゼ。ザフトという組織で一部隊の隊長を務めている」

男子25番、ラウル・クルーゼは軽く自己紹介する。

「・・・俺の名前は金田一。高校生だ」

金田一も軽い自己紹介で返す。

「アンタ、俺に何か用か?」

「・・・単刀直入に言おう。私と手を組まないかな? 私は、この馬鹿げた殺し合いを止めたいのだよ」

金田一の問いに、クルーゼはそう答える。

直後、クルーゼがある提案を持ち掛けた。

「どうかな? 勿論、リスクが大きいのは織り込み済みだ」

「・・・ああ、良いぜ。俺としても、協力者が欲しかったところだしな」

金田一の返答に、クルーゼは嬉しそうな表情を見せる。

「ありがたい。早速ではあるが、向こうに民家を見つけたのだ。一旦、そこで今後の方針を練ろう。あれが、その民家だ」

クルーゼがある方向に指を差す。

その先には、クルーゼの言う通りに民家が建っていた。見たところ、かなり年季が入っているように見える。

「見た目はボロ屋だが、床に隠し扉が備えられていて、その下に地下シエルターがある。恐らく、この島の建物の中でも、隠れ家にするのに最適な場所だろう」

「・・・よく見つけたな、そんなの」

クルーゼの説明に、金田一は感嘆の声を漏らす。

だが、何処か素っ気無ささえも醸し出している。

「私はこの近くの川で水を汲んで来よう。飲み水にするには汚いかも

しれないが、贅沢を言っていていられる状況でもないのな。金田一君は先に中に入っていてくれ」

クルーゼはそう言って川に向かおうとした。

その時だった。

「待てよ、クルーゼ。一つ確認しておきたいんだが、アンタの武器は何だ？」

突然、金田一がクルーゼにそんな質問を投げかけた。

金田一の問いに、クルーゼは少し戸惑いを覚える。

「……？草刈り鎌だ。ナイフと比べても、武器としてはあまり役に立ちそうにないが……今はあの民家に置いているが、それがどうかしたかな？」

「嘘を吐くなよ。アンタの武器は草刈り鎌じゃない……地雷だ。設置場所は玄関前……違うか？」

真剣な表情で突拍子の無い事を言う金田一。

それに対し、動揺するクルーゼ。

「な——何を言い出すのだね、金田一君！一体、何の根拠があつて——」

「悪いな。生憎、アンタが仕掛けた罠は既に見切つてんだよ。何せ、今の俺は2回目だからな」

「……何を言っているのか解りかねるが——見破られた以上は仕方が無い！私にはやらねばならん事があるのだよ!!」

クルーゼは、先程までの紳士的な様子から一転して、見る者を怯ませる程の憎悪を曝け出す。

「認めよう……君の洞察力は私の予想以上だったと！だが、それだけだ！私とて、ザフトの人間!!実戦ならば君には——」

「動くな！既に俺の仲間がお前の背中を狙っている！指一本でも俺に触れようものなら、お前の身体に風穴が開くぜ!!」

金田一のその言葉を聞いたクルーゼの、仮面で覆い隠された瞳の瞳孔が開く。

「——!?ば、馬鹿な——私が後をつけられていたとでも言うのか——」



クルーゼは後ろを向く。

刹那——

「嘘だよ、バーカ!!」

「うおッ!?!」

クルーゼの身体が、クルーゼの視線とは真逆の方向から強い力で押される。

金田一が自分に向けていた注意を逸らしたクルーゼに体当たりしたのである。

クルーゼの身体が、空中で俯せの体勢になっていく。

そして、クルーゼの身体が再び地面に触れたその瞬間、一瞬のやや小さな電子音が鳴り響き——

地面が爆ぜ、クルーゼは爆炎に包まれた。

そこは、ボロ屋の玄関前。クルーゼが地雷を設置した場所だった。爆発から1秒後、クルーゼは再び姿を現した。

黒焦げになった身体で。

既に事切れた状態で。

金田一は、クルーゼの亡骸を怒りと悲しみが混ざった表情で見下ろしていた。

あばよ、クルーゼ・・・アンタみたいな人が本当に仲間で、殺し合いを止めようと思っていたなら、俺も心強かったんだけどな。

それにしても——

金田一はバッグから砂時計を取り出す。

時の砂。

その効果は、使うと時間を少しだけ戻す事が出来るというものである。

まさに魔法の砂だ。

その一方で、欠陥を挙げるならば、何ととっても一度使ってから再び使えるようになるまでのインターバルが長い点だろう。それ故に使いどころが重要となる。

金田一は、自分の支給武器である時の砂を、先程クルーゼが——  
1回目で自分が地雷を踏んだ直後に使ったのである。

今回はコイツに助けられたな。ぶっちゃけ言うと、オカルトじみた代物に頼るのは癪だけど……この際だ。使える物は何でも使うつもりでかからないとな。

けど、殺す側もたまには悪くないか——？寧ろ、今の俺の殺人を推理してくれる人が現れたら、面白い展開になりそうだしな！

まあ、それは兎も角だ。どの道、最終目的は優勝じゃない。あくまでこの島から脱出する事だ。可能なら、より多くの参加者と一緒にな。

クルーゼのバッグから水と食料と残りの地雷を回収した金田一は歩き出す。

金田一は、より多くの参加者を島から脱出させる為に行動を開始する。

己のじつちゃんの名に懸けて。

「男子03番 金田一」

身体能力：C

頭脳：A

武器：時の砂

地雷 2個

スタンス：殺人犯プレーしつつ島からの脱出

思考：それはそれとして新鮮な気分だ〜！

身体状態：正常

精神状態：正常

「男子25番 ラウ・ル・クルーゼ 死亡」

女子29番、ガスト。

数本の触手がくっついた白い立方体のような見た目のそのモンスターは、悲しみのあまり、涙を流していた。

私達は戦うべきじゃない。

自分以外の参加者達と会った事は一度も無いけど、これだけは分かる。

この戦いは何としても止めなくてはならないわ。

ガストはそう決意した。

ふと、ガストは空腹を覚えた。

あつ……そういえば、目が覚めてから何も食べていなかったんだつたわ。

なお、ガストの胃が何処にあるのかについては読者の方々のご想像にお任せする。

ガストはバッグの中を見る。

入っていたのは、星降る腕輪だった。

ガストの支給武器である星降る腕輪は、装備した者の素早さを大幅に上昇させる特殊な装飾品である。

ガストが星降る腕輪を身に着けた、その時だった。

……？

何かしら？今、触手の一つに少し弱めの電流が走ったような気が—

ガストは何事かと身体の向きを変える。

「ギャアアアッ!!」

ガストの懐から悲鳴が聞こえた。

え———？

ガストが恐る恐る足元(?)を見ると、そこに緑髪の少年が、頭から血を流して倒れていた。

「イヤアアアア———!!!!!!!!!!」

目の前の緑髪の少年——男子01番、ステイング・オークレーの遺体を見たガストは思わず目を見開き、悲鳴を上げた。無理もない。目の前にある死体を見れば、並みの人間であればこういう反応をするのだ。

お、男の子が私の下で死んでいる——!?しかも、手には電気を帯びた手首のような物を持って——はっ!

分かったわ!つまり、この子が私の背後に忍び寄って、この手首のような物で私を襲っていたのね!それに気付かずに私が振り向いた時に、触手が直撃して——ごめんなさい!本当にごめんなさい!!

殺意が無く、ステイングの存在に気付いていなかったとはいえ、自

分が殺めてしまったという事実を知ったガストは咽び泣いた。

あつ・・・この子の遺体はどうしよう・・・？

数分の思索の末、ガストはある解決策を打ち出した。

このまま放置するのは可哀想・・・出来る事なら、他の皆には見せたくない——

——そ、そうだわ！いつその事、食べてしまえば良いのよ！食べてしまえば、遺体を皆に見せなくて済むし、私のお腹も一杯になる。一石二鳥ね！

頂きまーす——

そして数分後。

ステイングの遺体は、最早一欠片も残る事無くガストの胃袋へと消えていった。

ふう、ご馳走様——

その時、ガストに異変が生じた。

あら？何かしら、この感覚——??何故だか、もつと・・・もつと食べたくなツテキチャツタ——

ガストはいつもより速いスピードでフラフラと飛んで行く。

強大な食欲に駆られて。

自らの中で蘇った野生本能のままに。

次なる獲物を喰らうべく——

「女子29番 ガスト」

身体能力：A

頭脳：C

武器：星降る腕輪

スタンス：血の味を覚えた野生本能

思考：才腹ガ減ツタワ・・・

身体状態：正常

精神状態：野生化

「男子01番 ステイング・オークレー 死亡」

・・・島の中で催される殺し合い、か・・・まだ理解が追い付かな

い点もあるけど、犠牲者が増える前に何とかしないと。

男子14番、遠野志貴は自身の今後の動きについて考えていた。

黒髪ショートヘアに平均的な身長、ついでに眼鏡をかけている、何処にでもいるような男子高校生だ。

普通の人間と変わっている点といえば、死を視覚情報として捉える超能力『直死の魔眼』を持っている事ぐらいだろうか。

こうなった以上、指を銜えて見てもらえないな。こんな状況じゃ、死の恐怖からテストに乗る人も出て来そうだけど、しようがないよな。俺がやるべき事は、アルクエイド達と合流して、残りの参加者達を連れて島から脱出・・・ってところか。そうなると、アイツ等との戦いは避けられないな。でも、皆を守りながらってのはちよつと心配かな・・・。

そう思いながら志貴はバッグを開けた。

バッグの中には、アサルトライフルに似た奇妙な形の鞘に納められた刀が入っていた。

高周波ムラマサブレード。

とある家に伝わる、名工村正が16世紀頃に作ったとされる戦国太刀を改造する形で作られた高周波ブレードだ。

鞘に至っては、火薬の爆発力を用いてスパイクを打ち出し、それに押し出される形で太刀が飛び出す高速の抜刀を可能にする機構を備える特殊なものである。

凄い武器だな、これ・・・近接武器としては最強クラスじゃないか？ポテンシャルを完全に引き出すには、相当な練習が必要そうだけど。とにかく、これはありがたく貰っておこう。

志貴は早速、高周波ムラマサブレードを腰に付ける。

その後。

遠くから『ズドンツ』という音が聞こえた。

——！今、あっちから聞こえたのは・・・銃声か！

恐らく、あの方角に誰かいる・・・罠の可能性もありそうだけど、用心して行ってみるか。

志貴は銃声の聞こえた方角に向かって走り出した。

〔男子14番 遠野志貴〕

身体能力：B

頭脳：B

武器：高周波ムラマサブレード

スタンス：島からの脱出

思考：銃声が聞こえた方へ向かう

身体状態：正常

精神状態：正常

私立黒須学園 3年B組 名簿

〔男子01番 ステイング・オークレー〕

〔男子02番 デイアツカ・エルスマン〕

〔男子03番 金田一一〕

〔男子04番 草加拓海〕

〔男子05番 藤原文太〕

〔男子06番 シン・アスカ〕

〔男子07番 アウル・ニード〕

〔男子08番 碓シンジ〕

〔男子09番 泉研〕

〔男子10番 キラ・ヤマト〕

〔男子11番 ジョン・メイトリックス〕

〔男子12番 サイ・アーガイル〕

〔男子13番 ボルガ〕

〔男子14番 遠野志貴〕

〔男子15番 魔王〕

〔男子16番 トール・ケーニヒ〕

〔男子17番 高橋涼介〕

〔男子18番 風間真〕

〔男子19番 アスラン・ザラ〕

〔男子20番 ネコアルク・カオス〕

〔男子21番 パラガス〕

〔男子22番 ボンドルド〕

〔男子23番 スティーヴン・アームストロング〕

〔男子24番 藤原拓海〕

〔男子25番 ラウ・ル・クルーゼ〕

〔男子26番 ミイホン〕

〔男子27番 レグ〕

〔男子28番 スラリン〕

〔男子29番 武内樹〕

〔男子30番 高橋啓介〕

〔男子31番 ハイネ・ヴェステンフルス〕

〔男子32番 ベネット〕

〔男子33番 白銀武〕

〔男子34番 スライバ〕

〔女子01番 アルクエイド・ブリュンスタッド〕

〔女子02番 吾妻楓〕

〔女子03番 遠野秋葉〕

〔女子04番 赤城〕

〔女子05番 シエル〕

〔女子06番 ネコアルク〕

〔女子07番 キアナ・カスラナ〕

〔女子08番 比良坂夜露〕

〔女子09番 加賀〕

〔女子10番 兼志谷シタラ〕

〔女子11番 リコ〕

〔女子12番 フレズヴェルク〕

〔女子13番 ステラ・ルーシエ〕

〔女子14番 ラファイー〕

〔女子15番 翡翠〕

〔女子16番 轟雷〕

- 〔女子17番 ジャベリン〕
- 〔女子18番 鑑純夏〕
- 〔女子19番 無量塔姫子〕
- 〔女子20番 琥珀〕
- 〔女子21番 オーゼン〕
- 〔女子22番 ブローニャ・ザイチク〕
- 〔女子23番 百科文嘉〕
- 〔女子24番 ヘラルド〕
- 〔女子25番 ステイレット〕
- 〔女子26番 綾波レイ〕
- 〔女子27番 式波・アスカ・ラングレー〕
- 〔女子28番 エンタープライズ〕
- 〔女子29番 ガスト〕
- 〔女子30番 雷電芽衣〕
- 〔女子31番 ベルフアスト〕
- 〔女子32番 源内あお〕
- 〔女子33番 天城〕
- 〔女子34番 綾波〕
- 〔女子35番 真希波・マリ・イラストリアス〕
- 〔女子36番 バーゼラルド〕

生存者、残り60名



## 第7話

ここで、時間軸を志貴が銃声を聞く数分程前に巻き戻そう。

金髪ボブカットと吸血鬼特有の赤い瞳が特徴的な女子01番、アルクエイド・ブリュンスタッドは森の中を歩いてた。

まさか、殺し合いに参加させられるなんてねー。ていうか、あの言峰っていう神父、なんか声がネロに似ているし。

既に、アルクエイドは支給武器である対ライフル用防弾シールドを取り出し、左手に装備している。

その行動が、アルクエイドの命を救う事となった。

——!?この気配は——!

アルクエイドは瞬時に防弾シールドを構える。

直後、飛んできた銃弾が防弾シールドに当たり、弾かれた。

「森の中での銃撃戦・・・映画でよくある展開が、本当に起きるなんてねー。これで私も銃を持ってて、ついでに志貴がいてくれたらなー。ま、そうは言っても、私に支給されたのは防弾シールドなんだけど。そうでしょ、そこのお嬢さん?」

アルクエイドが銃弾が飛んできた方向を見る。

視線の先には、銃を構えている黒髪紫眼の少女の姿。

女子30番、雷電芽衣。

元・天命組織の戦乙女であり、同時に雷の律者でもある。

芽衣の表情は、何処か吹っ切れたようなものだ。

「そうかしら。狙撃をギリギリで弾く人なんて、映画でもそうそう出て来ない方よ」

アルクエイドは知る由も無いが、芽衣の望みは愛するキアナを生き長らえさせる事。

その為ならば、全てを諦め、同時に全てを受け入れる。

テストに乗る事も含めて。

「優勝を狙っているなら、最終的には自分以外の参加者を殺さないといけないんだから、どっちでもいいんじゃない?ただし——そつちは私とは違うタイプの鬼みたいだけど?」

「・・・違うタイプの鬼？律者じゃないようだけど——いえ、そんなのはどうでもいい。私にとって、この世界なんかよりも・・・ずっと大事な人がいるのよ!!」

先に動いたのは芽衣。

芽衣は銃——M4A1のトリガーを引き、アルクエイド目掛けて乱れ撃つ。

対するアルクエイドは、防弾シールドを構えたまま姿勢を低くし、銃撃を防ぎつつ芽衣に体当たりをかます。

牽制も兼ねてぶつ放したんでしようけど、数発貫つた程度で壊れるようなガラクタじやないのよね、この防弾シールド。

勿論、芽衣も負けてはいない。M4A1を真上に放り投げると、パUNCHをアルクエイドに2連続で繰り出す。アルクエイドはこれも防弾シールドで防ぐが、芽衣は間髪入れずに上段回し蹴りをアルクエイドの顔面に喰らわせる。

今の一撃を受けたアルクエイドは、口から血を流している。だが、アルクエイドは笑みを浮かべていた。

「やるわね・・・よし、その気になった!」

アルクエイドは俄然やる気になり、芽衣も落ちて来たM4A1をキヤッチした。

それから、2人の戦いは激しさを増した。

芽衣はアルクエイドから距離を取り、銃撃に徹する。だが、アルクエイドはそれに怯まず、芽衣に対して何度も間合いを詰める。格闘戦の経験があるとはいえ、芽衣もアルクエイドとの格闘戦は避け続けていた。2人の距離が互いの拳が届く程までに縮むと、すぐさま熾烈な殴り合いが始まる。そして、およそ十秒程殴り合っては芽衣が距離を取る。

これが数度繰り返され、芽衣がまたしてもアルクエイドから距離を取ろうとした、まさにその時だった。

1本の大木が、音を立てて2人のいる方向に傾き始めた——

「女子01番 アルクエイド・ブリュンスタッド」

身体能力：A

頭脳：C

武器：対ライフル用防弾シールド

スタンス：A p e r t u r e S c i e n c e をぶつ飛ばそうかな？

思考：もう少し頑張ってみる？

身体状態：小ダメージ

精神状態：正常

「女子30番 雷電芽衣」

身体能力：A

頭脳：B

武器：M4A1

スタンス：キアナちゃん以外は皆殺し

思考：邪魔を——しないでッ!!

身体状態：小ダメージ

精神状態：キアナへの愛

この建物——2階はオフィスなのか。1階の方は、多分ガレージか何かだな。

男子02番、ディアツカ・エルスマンは海岸近くにある建物の中にいた。

全く、あの戦闘機に撃ち落とされて地面に叩き付けられたかと思ったら、目覚めてみれば、何故かこんな殺し合いに参加させられていたなんて、訳が分からないぜ。

・・・まあ、強そうな弓が入っていたのは良いんだけどな。

ディアツカは持っている弓に目を向ける。

その弓は、空母の艦装を模したデザインとなっている。

ディアツカの支給武器はエンタープライズの艦装。艦載機は光る矢の状態ですら放つと、発艦させる事が出来るが、弓が破損してしまふと発艦出来なくなる為、弓の扱いには十分な注意が必要である。

遂に俺も弓道デビュー・・・いや、アーチエリーデビューだっけ？でも、狭い所じゃ戦い辛そうなのが玉に瑕なんだよな。

まあ、それはそれとして・・・こんな形での殺し合いなんて、俺は

やだね。てゆーか、この首輪さえどうにか外して、あの Aperture Science だって奴らをぶっ潰さないと不味いつて。あーいう奴らがいるから、何時まで経っても戦争が終わらないんじゃないの？

よし、とりあえず最終目標は打倒 Aperture Science だって事で――

「誰だい？」

「うおッ!？」

突然、背後から声をかけられたディアツカは驚いて声のした方向に振り向く。

そこにいたのは、大柄な女性。

女性は口を開く。

「何だい、一言声をかけたただけなのに驚く事は無いじゃないか。まあいい……お前、この殺し合いに乗ってる奴かい？」

女性はそう問うてきた。

「あつ……いや、俺は乗ってないぜ。こう見えて、俺は軍人なんだ！こんな殺し合いなんて許せる訳無いに決まってるだろ!？」

ディアツカは動揺を必死に隠しながら、そう答えた。

「ふくん、その年で軍人ねえ……」

女性は訝しげな表情でディアツカを見つめる。

や、やべえ……俺、殺されるかも――

ディアツカが身の危険を感じるのとほぼ同時に、女性は少しながら警戒を緩めた。

「どうやら、お前は乗ってない奴のようだねえ。いいさ。私はお前のようなのを捜していたんだ」

俺のようなのを捜していた？って事は、この人も……。

「ああ、まだ名前を言っていないかったね。私はオーゼン……『不動卿』という名の方が通りが良いかな。まあ、こんな島じゃ、あまり意味は無いだろうけどね」

「……ディアツカ・エルスマン。プラントの国軍『ザフト』、クルーゼ隊所属の赤服。よろしくお願いします、オーゼンさん」

ディアツカと女性——女子21番、オーゼンは軽い自己紹介を交わした。

「男子02番 ディアツカ・エルスマン」

身体能力：A

頭脳：B

武器：エンタープライズの艤装

スタンス：打倒Aperture Science

思考：まともな人に会えて良かった・・・

身体状態：正常

精神状態：正常

「女子21番 オーゼン」

身体能力：S

頭脳：B

武器：???

スタンス：島からの脱出

思考：案外、まともなヤツがいるじゃないか

身体状態：正常

精神状態：正常

遠野志貴は高周波ムラマサブレードで大木を切った。

だが、ただ切ったのではない。

今の志貴の顔に、掛けられていた筈の眼鏡はない。志貴は反射的に眼鏡を外し、制服のポケットに入れていたのである。

見えた——いつもより若干ぼやけてはいるけど、死が見えた！

そう・・・幸か不幸か、志貴は自分の持つ直死の魔眼の封印を免れたのである。

切られた大木は音を立てながら雷電芽衣のいる方向に倒れていく。

これを察知した芽衣は、近くの木を蹴って飛び上がり、大木を回避する。

「かかった——!!」

この動作で生まれた芽衣の隙を、志貴は見逃さなかった。芽衣が

取ったこの行動こそが、志貴の狙いだったのである。

志貴は倒れた大木を踏み台にし、滞空している芽衣と同じくらいの高さにまで飛び上がった。

「あつ——!?!」

芽衣が自分が犯したミスに気付いた直後、芽衣の身体は志貴により、空中で八つ裂きにされた。

「大丈夫か、アルクエイド!」

着地した志貴は、眼鏡をかけながらアルクエイドに近寄る。

「この防弾シールドのおかげで何とか、ね。とにかく、志貴が来てくれて良かった!」

「なんだ、全然大丈夫だな。銃で武装している女の子が撃ちまくっていただけから、流石にヤバいと思ったけど」

余裕の表情を見せるアルクエイドを見た志貴は、表情こそ呆れ顔であるが、アルクエイドが無事だった事に安堵する。

「・・・って、えっ!?!志貴・・・!?!嘘、本物・・・!?!」

アルクエイドは何故か驚いた。

「本物です。その、とりあえず始まってから間もなく、誰かと会って不味い事が起きそうになったら殴って解決すればいい、という暴走行為をすぐさま止めなさい。お約束違反、著しい」

「なんで、ここ森の中よ!?!志貴、どうやって私がいる場所が分かったの!?!」

「銃声を聞きました。そして、行ってみたら貴女とさっきの銃を持っている人が戦っていたので援護しました。というかだな、お前が単独で行動すると絶対にややこしくなって、この島からの脱出どころじゃなくなるだろ?なんで、俺と組まないか?バラバラで行動するより、グループで行動した方が生存確率が高い筈だから」

「あつ、そっか」

「男子14番 遠野志貴」

身体能力：B

頭脳：B

武器：高周波ムラマサブレード

スタンス：島からの脱出

思考：アルクエイドはいつも通りか・・・

身体状態：正常

精神状態：正常

〔女子01番 アルクエイド・ブリュンスタッド〕

身体能力：A

頭脳：C

武器：対ライフル用防弾シールド

スタンス：Aperture Scienceをぶっ飛ばそうかな？

思考：早めに志貴と合流出来て良かった

身体状態：小ダメージ

精神状態：正常

〔女子30番 雷電芽衣 死亡〕

私立黒須学園 3年B組 名簿

〔男子01番 スティング・オークレー〕

〔男子02番 デイアツカ・エルスマン〕

〔男子03番 金田一一〕

〔男子04番 草加拓海〕

〔男子05番 藤原文太〕

〔男子06番 シン・アスカ〕

〔男子07番 アウル・ニード〕

〔男子08番 碓シンジ〕

〔男子09番 泉研〕

〔男子10番 キラ・ヤマト〕

〔男子11番 ジョン・メイトリックス〕

〔男子12番 サイ・アーガイル〕

〔男子13番 ボルガ〕

〔男子14番 遠野志貴〕

〔男子15番 魔王〕

- 〔男子16番 トール・ケーニヒ〕  
〔男子17番 高橋涼介〕  
〔男子18番 風間真〕  
〔男子19番 アスラン・ザラ〕  
〔男子20番 ネコアルク・カオス〕  
〔男子21番 パラガス〕  
〔男子22番 ボンドルド〕  
〔男子23番 ステイヴン・アームストロング〕  
〔男子24番 藤原拓海〕  
〔男子25番 ラウ・ル・クルーゼ〕  
〔男子26番 ミイホン〕  
〔男子27番 レグ〕  
〔男子28番 スラリン〕  
〔男子29番 武内樹〕  
〔男子30番 高橋啓介〕  
〔男子31番 ハイネ・ヴェステンフルス〕  
〔男子32番 ベネット〕  
〔男子33番 白銀武〕  
〔男子34番 スライバ〕  
〔女子01番 アルクエイド・ブリュンスタッド〕  
〔女子02番 吾妻楓〕  
〔女子03番 遠野秋葉〕  
〔女子04番 赤城〕  
〔女子05番 シエル〕  
〔女子06番 ネコアルク〕  
〔女子07番 キアナ・カスラナ〕  
〔女子08番 比良坂夜露〕  
〔女子09番 加賀〕  
〔女子10番 兼志谷シタラ〕  
〔女子11番 リコ〕



- 〔女子12番 フレズヴェルク〕
- 〔女子13番 ステラ・ルーシエ〕
- 〔女子14番 ラフィー〕
- 〔女子15番 翡翠〕
- 〔女子16番 轟雷〕
- 〔女子17番 ジャベリン〕
- 〔女子18番 鑑純夏〕
- 〔女子19番 無量塔姫子〕
- 〔女子20番 琥珀〕
- 〔女子21番 オーゼン〕
- 〔女子22番 ブローニャ・ザイチク〕
- 〔女子23番 百科文嘉〕
- 〔女子24番 ヘラルド〕
- 〔女子25番 ステイレット〕
- 〔女子26番 綾波レイ〕
- 〔女子27番 式波・アスカ・ラングレー〕
- 〔女子28番 エンタープライズ〕
- 〔女子29番 ガスト〕
- 〔女子30番 雷電芽衣〕
- 〔女子31番 ベルファスト〕
- 〔女子32番 源内あお〕
- 〔女子33番 天城〕
- 〔女子34番 綾波〕
- 〔女子35番 真希波・マリ・イラストリアス〕
- 〔女子36番 バーゼラルド〕

生存者、残り59名

## 第8話

島の上空を飛ぶ1機のヘリコプター。

そのコックピットで、女子35番、真希波・マリ・イラストリアスは操縦桿を握っていた。

これは良い物を引いたにや。剣や槍といった近接武器は勿論当たらない。例え、銃火器で攻撃されたとしても、ロケットランチャーでもない限りは大して脅威にはならないし、寧ろ、応戦するには過剰なレベルの武装が付いているから、少なくとも、支給武器においてはかなり優位に立てるし。

マリが操縦しているのはアパッチ・ロングボウAH-64D。アメリカで開発された有名な攻撃ヘリだ。アメリカ陸軍の他、陸上自衛隊等で運用されている。

唯一の弱点は島の外に出ると首輪共々、自爆装置が作動するっていう点——それでも、空を飛べるっていうのは、戦術的優位に立てるという意味を持つっていう事にもなるから。でも、島からの脱出を目的とするとなると、何人も乗せられないこのアパッチじゃ、微妙なところなんだよね——。

マリがそう思っていると、一瞬、空で何かが光った。

……?何か飛んでいる?いや、飛んでいたとしても、この島じゃ……私のアパッチを除いて鳥ぐらい——

——いや、違う?あれは……ま、まさか!?

マリは迫りくる何かを回避すべく、操縦桿を右に倒す。

だが、時既に遅し。その瞬間に凄まじい衝撃がアパッチを襲った。相当大きなダメージも喰らったのか、アパッチは大きく揺れ始め、コックピットの彼方此方から異常を知らせる警告音も同時に鳴り響く。

——えっ?!

余りの事態に、マリは思考停止に陥った。

仮にこの時、マリが思考停止に陥っていなかったとしても、マリ自身を迎える結末は変わらなかっただろう。

何れにせよ、この場において確かな事は——マリは何かを確認した時点で詰んでいた、という事だ。

「女子35番 真希波・マリ・イラストリアス 死亡」

アパッチは墜落し、ただ大きいだけの鉄屑と化した。

それに背を向けて着地したのは、生え際が後退しつつある髪、インテリ感を醸し出す眼鏡、そして着ている制服がはち切れんばかりの逞しい肉体が特徴的な中年男性。

彼の姿を初めて見たなら、きつと某アメコミに出て来るような怪物の類と勘違いするだろう。

そんなスポーツマン系アメリカ合衆国上院議員、男子23番、ステイヴン・アームストロングが目指すのは真の自由。

その為ならば、大統領だってぶん殴ってみせるし、大統領になった暁には着飾った気に入らない者達や訳の分からない者達を皆ぶん殴る。

それ故、このテストは正しく理想に近いもの……であるように見えるが、アームストロングにとっては不満に感じるものだった。

あの言峰とかいう奴の説明を聞く限り、このテストとやらはAperture Scienceとやらが運営しているらしい。恐らく、これが関わっているギャンブルか何かで利益を出しているのだろう。全く、気に入らねえ奴らだ——俺に首輪を付けて良い気でいられるのも今のうちだ！

アームストロングにとって、Aperture Scienceはぶん殴る対象であると言えよう。何故なら、アームストロングは、ビジネスとしての戦争や暴力、そして、信念無き闘争は唾棄すべきものであると考えているのだから。

アームストロングは歩き出す。

気に入らない奴らをぶん殴る為に。

真の自由の実現の為に。

「男子23番 ステイヴン・アームストロング」

身体能力：S

頭脳：A

武器：無し

スタンス：Aperture Scienceはぶん殴る

思考：さて、まずは首輪を外す方法を見つけるか

身体状態：正常

精神状態：正常

その一部始終を少し離れた所の茂みから見ていた者がいた。

な——何者だ、アイツ!? 相当な高さから落ちて無事、というならまだ解るが、その途中でヘリコプターを撃墜するとは……!

男子17番、高橋涼介。

高橋啓介の兄である彼は、アームストロングの力に戦慄を覚えていた。

見たところ、アイツは武器を持っているようには見えなかった。ハズレだった可能性も否定できないが……何れにせよ、奴は自らの身体能力だけでヘリコプターを撃墜したのは間違い無い!

とんでもない奴がこの殺し合いに参加させられていたとはな——  
—奴を味方に付けたいが、如何せん、殺気が強すぎる……どうしたものか……。

現在、涼介は支給武器であるフレズヴェルクIIアーテルのボディスーツとアーマーユニットを身に纏っている。仮に戦いを挑んだとすれば、運が良ければ倒せるかもしれないだろう。

『挑む』か、『やり過ぎ』か。

涼介が選んだのは——『やり過ぎ』という選択肢だった。

念の為、奴から離れておくか。今はリスクを避ける。啓介や藤原と合流しておきたい。

アームストロングが立ち去った事を確認した涼介は、茂みから出て移動を開始する。

さて、2人が無事だと良いんだが——ん?

ふと、涼介の視界に、異物が入る。

地面には草が生い茂り、周りには木が幾つか存在する自然の空気の

中では、自然物とは思えないようなそれは、確かに異物である。  
涼介はそれを拾い上げる。

「これは、一体・・・？」

それは、怪しい液体の入った金の杯だった。液体は人が飲む物とは思えないような不気味なもので、飲むには勇気があるだろう。

だが・・・

「一応・・・持っておくか——？」

何かに使えるかもしれないと考えた涼介は、バッグにそれを入れた。

この杯が何なのかも分からぬまま。

涼介は前方に視線を向け、再び移動を開始した。

「男子17番 高橋涼介」

身体能力：C

頭脳：A

武器：フレズヴェルクIIアーテルのアーマーユニット

赤黒い液体が入った金の杯

スタンス：島からの脱出

思考：啓介と藤原を捜す

身体状態：正常

精神状態：正常

レグはアスファルトの道路に沿って歩いている。

途中、勾配がやや水平になったところで分かれ道があったのだが、東へと続く道はくねくねと曲がった下り坂になっており、北へと続く道は今までと同様の上り坂となっていた。レグは上り坂となっている、北へと続く道を通る事を選んだ。

この判断は正解だった。

レグは何かに気づき、足を止める。

見上げると、建造物のようなものが視界に入る。頂上まで後もう少しの所まで来ていたのだ。

あれは・・・家？誰かいるのだろうか？

・・・あそこを訪ねるとしよう。もしかしたら、リコを見た人がいるかもしれない。

レグは再び歩を進める。

果たして、その先にレグの望むものはあるのだろうか。

白銀武と鑑純夏は山頂の民家に身を隠す事にした。

山頂故に見晴らしが良く、接近して来る外部の者をすぐに察知出来る。

更に、裏手に井戸がある事から、この民家は拠点にするには最も環境が整った所と言えるだろう。

武は今、窓から外を見張っている。殺し合いに乗っている者の接近に備える為である。

「タケルちゃん！お水汲んで来——」

と、そこに純夏が井戸から汲んだ水の入ったバケツを持って武の元へと駆け寄る。

その時。

——あれは・・・

「純夏、静かに！」

「わわわっ!?!ど、どうしたの!?!」

武のその言葉に、純夏は驚く。

「今、こっちに誰か近付いて来てる。背の低い男の子が1人、着けているのは・・・あれは眼鏡、いや、モノクルか何かか？俺達がここに居る事に気付いているかもしれない」

2人は窓から人影を見る。

バイキングがよく被ってそうな特徴的な形の帽子を被っており、何処か近未来的なデザインのモノクルを身に着けているのが見て取れる。

「本当だ・・・」

「もしかしたら協力してくれるかもしれないし、情報も欲しいところだしな」

「協力してくれるかな・・・?」

「様子を見る。乗っているようなら、中には入れない」

もうすぐそこまで近付いて来たので、扉の前にスタンバイすると、ノックを叩く音がした。どうやら、相手はここに人がいる可能性も考えていたようだ。

扉越しにやり取りをしたところ、特に怪しい言動は無かった。動きも不審な点は無かったので、武達は中に入れる事にした。

レグは軽く自己紹介をすると、続けてこう言った。

「僕は、友達を捜しているんだ。リコという名前の女の子なのだが：：2人は、何処かで見てはいないだろうか」

「リコ？．．．いや、知らないな。純夏は知ってるか？」

「私も知らないかな．．．そうだ！写真とかは持ってないかな？」

「．．．すまない、そういうのは持ってないんだ」

仮に持っていたとしても、眠っている間に持ち物ごと奪われたか．．．。

「そうなんだ．．．ごめんね、力になれなくて」

レグが残念そうな表情を浮かべるのを見て、武は口を開いた。

「——レグ、お前はそのリコって人を捜しているんだろ？もし良かったら、俺達と組まないか？」

「君達と．．．？」

武は一呼吸置いて、話を続ける。

「2人共、よく聞いてくれ。俺はこんなテスト、殺し合いなんか糞くらえだ。だから、テストを潰そうと思う。AS社の奴等と戦ってでも、皆と一緒にこの島から脱出するんだ」

武は自分の意志を純夏とレグに告げる。その目は、本物だ。

「タケルちゃん．．．」

純夏は武の顔を見つめる。武の言葉に感銘を受けたようだ。

「．．．分かった！私、タケルちゃんを信じる！」

「僕も同意見だ。恐らく、僕達以外にも殺し合いを望まない人達がいる筈だろう。その人達を集められれば、もしかしたら出来るかもしれない」

純夏とレグは武の意志に賛同した。

「男子33番 白銀武」

身体能力：A

頭脳：B

武器：デスノート

スタンス：純夏や他の参加者達と共に島からの脱出

思考：これからどうするか・・・

身体状態：正常

精神状態：正常

「男子27番 レグ」

身体能力：A

頭脳：C

武器：スカウター

スタンス：島からの脱出

思考：仲間が出来て良かった

身体状態：正常

精神状態：正常

「女子18番 鑑純夏」

身体能力：B

頭脳：C

武器：メタルキングの剣

スタンス：島からの脱出

思考：タケルちゃんと生きて帰りたい

身体状態：正常

精神状態：正常

「轟雷くーバトルしよー！」

女子12番、フレズヴェルクは大声で叫びながら歩いている。

しかし、フレズの言葉に対する返事は来ない。恐らく、フレズの周囲に誰もいないのだろう。

今、フレズは右手に銃を持っている。それはまるで玩具のような見た目で、とても見えそうには見えない。



退屈で仕方が無いフレズは辺りを見回す。すると、目に映ったとある木の陰に何かが存在する事に気付いた。

その木の陰には、人の姿があつた。ツインテールに纏められたボサボサな銀髪、ウサギのように赤い瞳。眠そうな目つきからはとても闘志を感じられない。

木陰に潜むウサ耳のカチューシャの少女：女子14番、ラファイーは眠っている。

「zzz・・・うん？」

ラファイーは目を覚ます。フレズが近付いてきた事に気付いたようだ。

ラファイーは立ち上がると、フレズの方を向く。

「・・・誰・・・？」

「ちえつ、轟雷じゃないのか・・・。しようがないから、轟雷の前に先ずお前に勝つてやる！」

そう言うと、フレズはいきなり銃口をラファイーに向け、引き金を引いた。

対するラファイーは咄嗟に身構えるが――

「・・・音が、出ない？」

――銃声は鳴らなかつた。

ラファイーは首を傾げた。

もしかして、壊れている・・・？でも、慌ててないみたい。

それとも・・・何か、別の武器を持っている？もし、そうだとした

ら――

ラファイーが警戒を強め、フレズの考えを読もうとしたその刹那。

ふと、空で何かが光る。

光・・・いや、正確には空から降ってきた一条のビームは、まるで吸い込まれるようにラファイーの頭上に落ちた。

「――あ」

気付いた頃には、時既に遅し。ラファイーは成す術無くビームと爆炎に飲み込まれ、煙が立ち込めた。

煙が収まった時には、ラファイーの姿は何処にも無かつた。

「女子14番 ラファイー 死亡」

ラファイーが塵一つ残らず消し飛んだ事を確認したフレズは、不敵な笑みを浮かべた。

「へっへーん！そんな所で棒立ちしてるから簡単にやられるんだよーだ！」

フレズはそう言って、銃に目を移す。

「まさか、空からビームが降ってくるなんて思わないだろーな！今さっきのヤツだって、死ぬ直前になるまで気付かなかつたんだもん！」

そう、玩具の銃のように見えるこの武器はドーンハンマー。

これを使ってレーザーを照射すると、衛星軌道上に存在する衛星砲が、照射されたポイントに向けてビームを放つ。

相手が動いていなければ確実に当たるという訳だ。

だが、使用出来るのはドーンハンマー自体が屋外に存在する上で衛星砲が直上にある時のみである為、そういう意味では使い勝手が悪い武器とも言える。

「女子12番 フレズヴェルク」

身体能力：A

頭脳：D

武器：ドーンハンマー

スタンス：優勝して最強のフレームアームズ・ガールになる

思考：次の相手を探す

身体状態：正常

精神状態：正常

それは、武とレグがこれからの行動について相談していた時の事だった。

「タケルちゃん、レグ君、ちょっと来て！」

窓際にいる純夏が呼んできた。

「どうしたんだ、純夏？」

「誰か来たのだろうか？」

武とレグが純夏に聞くと、純夏は続けてこう言った。

「何か変な人がこっちに向かって来てるよ！武器は持ってないみたいだけど……」

「武器を持っていない……？」

武とレグが見てみると、確かにその人影は武器と言えるようなものを持っていないようだった。

「おかしいな……武器は全員に支給されている筈だろ？何も支給されなかったとは思えないし……」

武はこれに疑問を覚える。

もしかして、何か隠し持っている……？デスノートが支給されるくらいだから、持っていてバレないような武器があつても不思議じゃないか。

「もしかしたら、誰かが僕をつけていたのかもしれない……」

レグもそう予測を立てる。

「どうするか……もう少し様子を見るか——」

「武さん、ちよつといいだろうか？」

すると、レグが武に声をかけてきた。

「どうした、レグ？」

「純夏さんの姿が見当たらないのだが……」

「……へっ？」

くっそー、あの金髪女め——いきなり俺の顔を引つ搔くとは！どうしてくれるのだ！

幸い、この山の頂上には小屋がある。あそこで手当てを兼ねて一休みするでしょう。よし、行ってみよー！

……ん？小屋から誰か出てきたぞ。あの姿は女のようにだ——つて、こっちに走って来ている!?

「う、うわあああ!?!こっちに來るなああ——っ!!!」

- 〔男子01番 ステイング・オークレー〕
- 〔男子02番 デイアツカ・エルスマン〕
- 〔男子03番 金田一一〕
- 〔男子04番 草加拓海〕
- 〔男子05番 藤原文太〕
- 〔男子06番 シン・アスカ〕
- 〔男子07番 アウル・ニーダ〕
- 〔男子08番 碓シンジ〕
- 〔男子09番 泉研〕
- 〔男子10番 キラ・ヤマト〕
- 〔男子11番 ジョン・メイトリックス〕
- 〔男子12番 サイ・アーガイル〕
- 〔男子13番 ボルガ〕
- 〔男子14番 遠野志貴〕
- 〔男子15番 魔王〕
- 〔男子16番 トール・ケーニヒ〕
- 〔男子17番 高橋涼介〕
- 〔男子18番 風間真〕
- 〔男子19番 アスラン・ザラ〕
- 〔男子20番 ネコアルク・カオス〕
- 〔男子21番 パラガス〕
- 〔男子22番 ボンドルド〕
- 〔男子23番 ステイヴン・アームストロング〕
- 〔男子24番 藤原拓海〕
- 〔男子25番 ラウ・ル・クルーゼ〕
- 〔男子26番 ミイホン〕
- 〔男子27番 レグ〕
- 〔男子28番 スラリン〕
- 〔男子29番 武内樹〕
- 〔男子30番 高橋啓介〕

- 〔男子31番 ハイネ・ヴェステンフルス〕  
〔男子32番 ベネット〕  
〔男子33番 白銀武〕  
〔男子34番 スライバ〕
- 〔女子01番 アルクエイド・ブリュンスタッド〕  
〔女子02番 吾妻楓〕  
〔女子03番 遠野秋葉〕  
〔女子04番 赤城〕
- 〔女子05番 シエル〕  
〔女子06番 ネコアルク〕  
〔女子07番 キアナ・カスラナ〕  
〔女子08番 比良坂夜露〕  
〔女子09番 加賀〕  
〔女子10番 兼志谷シタラ〕  
〔女子11番 リコ〕  
〔女子12番 フレズヴェルク〕  
〔女子13番 ステラ・ルーシエ〕
- 〔女子14番 ラフィー〕  
〔女子15番 翡翠〕  
〔女子16番 轟雷〕  
〔女子17番 ジャベリン〕  
〔女子18番 鑑純夏〕  
〔女子19番 無量塔姫子〕  
〔女子20番 琥珀〕  
〔女子21番 オーゼン〕  
〔女子22番 ブローニャ・ザイチク〕  
〔女子23番 百科文嘉〕
- 〔女子24番 ヘラルド〕  
〔女子25番 ステイレット〕  
〔女子26番 綾波レイ〕

〔女子27番 式波・アスカ・ラングレー〕

〔女子28番 エンタープライズ〕

〔女子29番 ガスト〕

〔女子30番 雷電芽衣〕

〔女子31番 ベルファスト〕

〔女子32番 源内あお〕

〔女子33番 天城〕

〔女子34番 綾波〕

〔女子35番 真希波・マリ・イラストリアス〕

〔女子36番 バーゼラルド〕

生存者、残り57名